

第八章 XII区の遺構と遺物

1. XII区の概要

① 総説

XII区は、調査地点の東辺の中ほどに設定した調査区である。発掘調査の全期間を通じて、ここには出入り口があった。旧冷泉小学校の校門を踏襲したものである。また、出入り口脇には防火水槽が埋設されており、すでに深く掘削され、遺構は遺存しないものとされていた。XII区は、出入り口と防火水槽跡を避けて、その南側に設定した。出入り口を挟んでVII区と対置し、X区・VI区とは境を接する位置関係にある。

表土掘削には、令和4年1月19日に着手した。表土直下を第一面とし、砂丘砂層を検出面にして第2面を設定した。第2面において、遺構の重複のために遺構検出、判別が困難な部分があり、そのために砂丘表面を少し削り込む形で遺構検出・調査を実施した。これを第3面とした。

XII区の調査は、2月14日をもって埋め戻し、終了した。

② 第1面

第1面は、現地表から2.5～2.7mほど掘り下げた、標高2.0～2.8mで設定した遺構検出面である。表土直下の攪乱層を除去して検出した整地土壌に設けた面であり、鍵層をもとに設定した生活面としての遺構検出面ではなく、便宜的に設定した作業面である。砂丘上面はかなり近く、整地土壌は砂混じりの砂質土で、随所で砂丘砂層が顔を出していた。



Ph.244 XII区第1面全景(北東より)

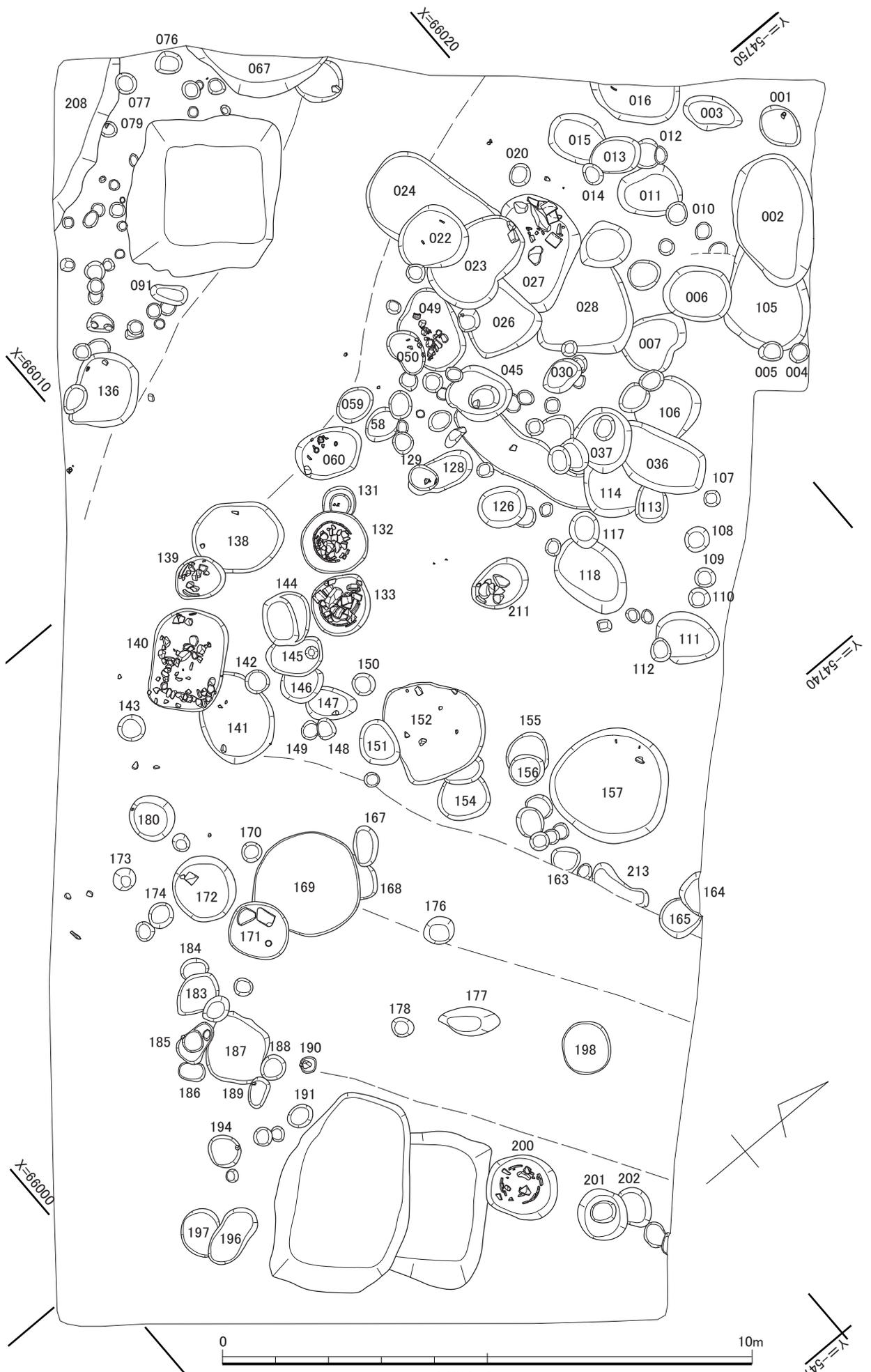


Fig.177 XII区第1面遺構全体図(1/100)

井戸・土坑・柱穴など204基の遺構を検出、調査した。近世以後、近現代の掘り込みが多く出土した。同時に060号遺構の様に中世中頃の土師器一括廃棄遺構でありながら第1面ですでに検出された遺構もあった。さらに001号遺構は、火山で硫黄とともに生成された硅化岩がもたらされ出土した土坑だが、12世紀前半の遺構と考えられる。132号遺構と133号遺構は、ほとんど接するように並んだ土坑で、ともに陶器の甕が正置されていた。近世の埋め甕遺構であろう。

したがって、第1面は、中世前期以降、近世にいたるまでの幅広い時代の遺構を検出した調査面であったといえる。

なお、第1面遺構検出時点調査区を東西、南北に通る溝のプランが見えたが、上位から切り込む遺構があったため、溝の調査は第2面調査に回し、第1面では上の遺構を掘り上げることとした。

③ 第2面

黄白色の砂丘砂層上面で設定した遺構検出面である。標高では、1.8～2.6mで、調査区の南側で高く、北側に向かって下降していく状況が明らかになった。一方、西に向かって若干傾斜している様子が見て取れたが、顕著な下降はみられなかった。

井戸・土坑・柱穴など155基の遺構を検出した。第1面調査時に掘削を後送りした、東西溝と南北溝については、トレンチを設定し、土層観察ベルトを残しながら精査した。南北溝（235号遺構）は1条の溝であったが、東西溝（236号遺構）は2条の溝の切り合い、重複関係であったことが明らかになった。調査区の西角にわずかにかかって出土した209号遺構、210号遺構などは、第1面の溝であるが、上述の235号遺構とは3.5mの間をおいて平行することが明らかとなった。この間の土壌は砂質土で整地土層などは見られなかった。この部分をたとえば道路などと認定することはできないが、町割り等の何らかの区画にかかわる可能性は考えてよいように思う。



Ph.245 XII区第2面全景(北東より)

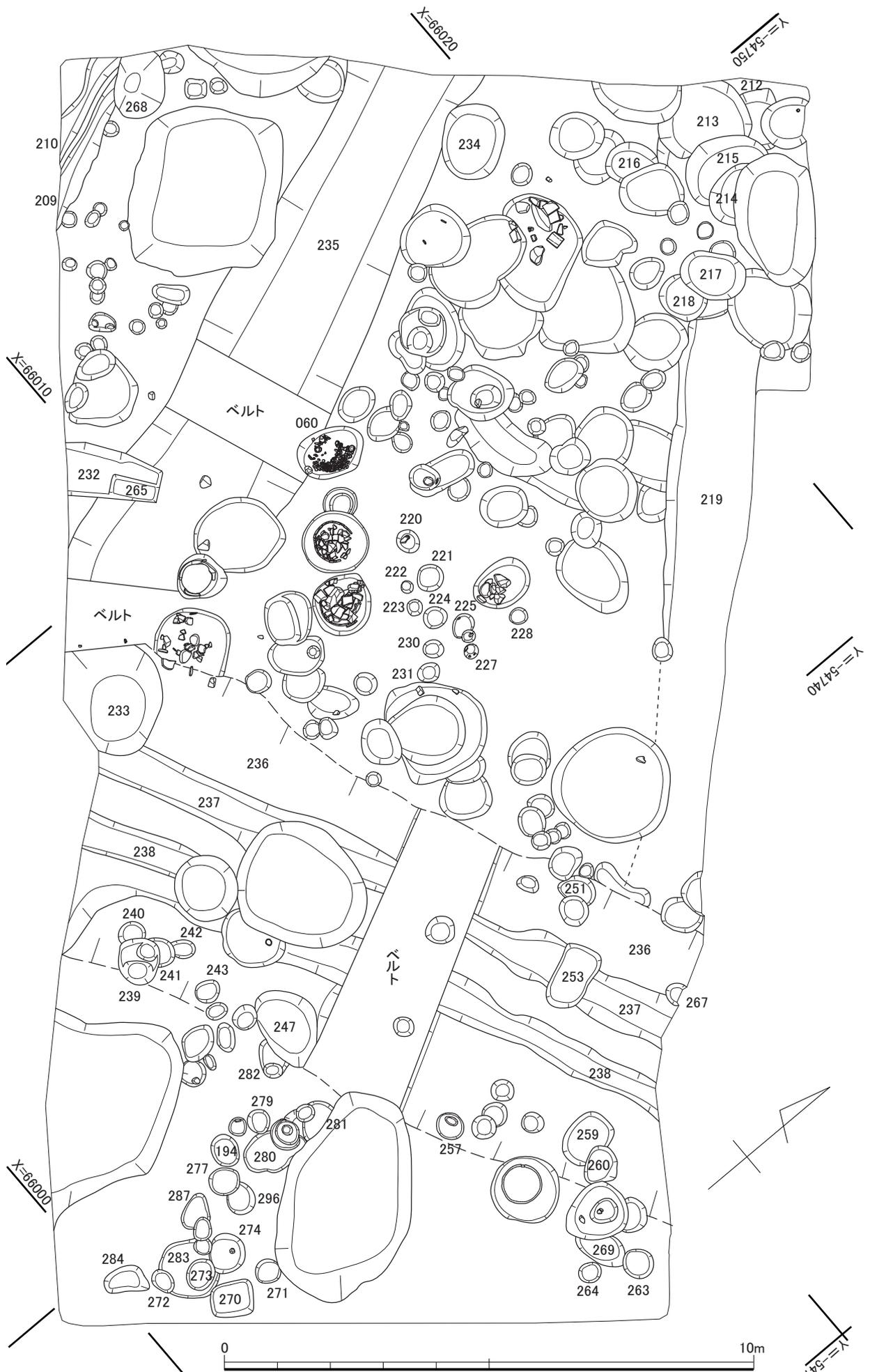


Fig.178 Ⅱ区第2面遺構全体図(1/100)

第2面では、古代から中世後半までの遺構を調査した。

④ 第3面

第2面のほぼ中央部分は、遺構が集中していて、切り合いの下になった遺構の検出は困難であった。そのため、遺構密度の高いⅩⅦ区中央部分を中心に広めに掘り下げて遺構検出を行った。これを第3面とした。

柱穴・井戸・溝など、61基の遺構を調査した。柱穴は、調査区北側の比較的遺構密度の薄い部分で、深めに掘り下げて検出したもので、淡褐色砂を埋土とする。遺物の出土はなかったが、古代の可能性が高い。遺構密度が高い中央部では、最下遺構として、357号遺構が出土した。大型の掘方を持つ井戸である。逆に言えば、上位にあった遺構は、357号遺構の埋土に切りこんで営まれていたために土質の変化が認めにくく、検出にこずったといえる。このほか、342号遺構も第3面で新たに検出した井戸である。また、348号遺構は、235号遺構（溝）の西壁面～底面より検出した井戸である。

351号・352号遺構は、第1面157号遺構床面から検出したが、157号遺構の下部に当るのか、関係性は明らかにできなかった。

溝では、第2面219号遺構の下部が掘り残しで検出されたため、掘り足しを行った。

359号遺構は、ⅩⅦ区西辺近くで赤色顔料が散布していた部分として検出したものである。精査したが、掘り込みなどは全くなく、砂丘砂の表面に顔料が約60cm×30cmの範囲で広がっていただけである。一つの可能性として、古墳の埋葬主体の様に遺構の底面に赤色顔料を敷いていた可能性を考えたい。



Ph.246 ⅩⅦ区第3面全景(北東より)

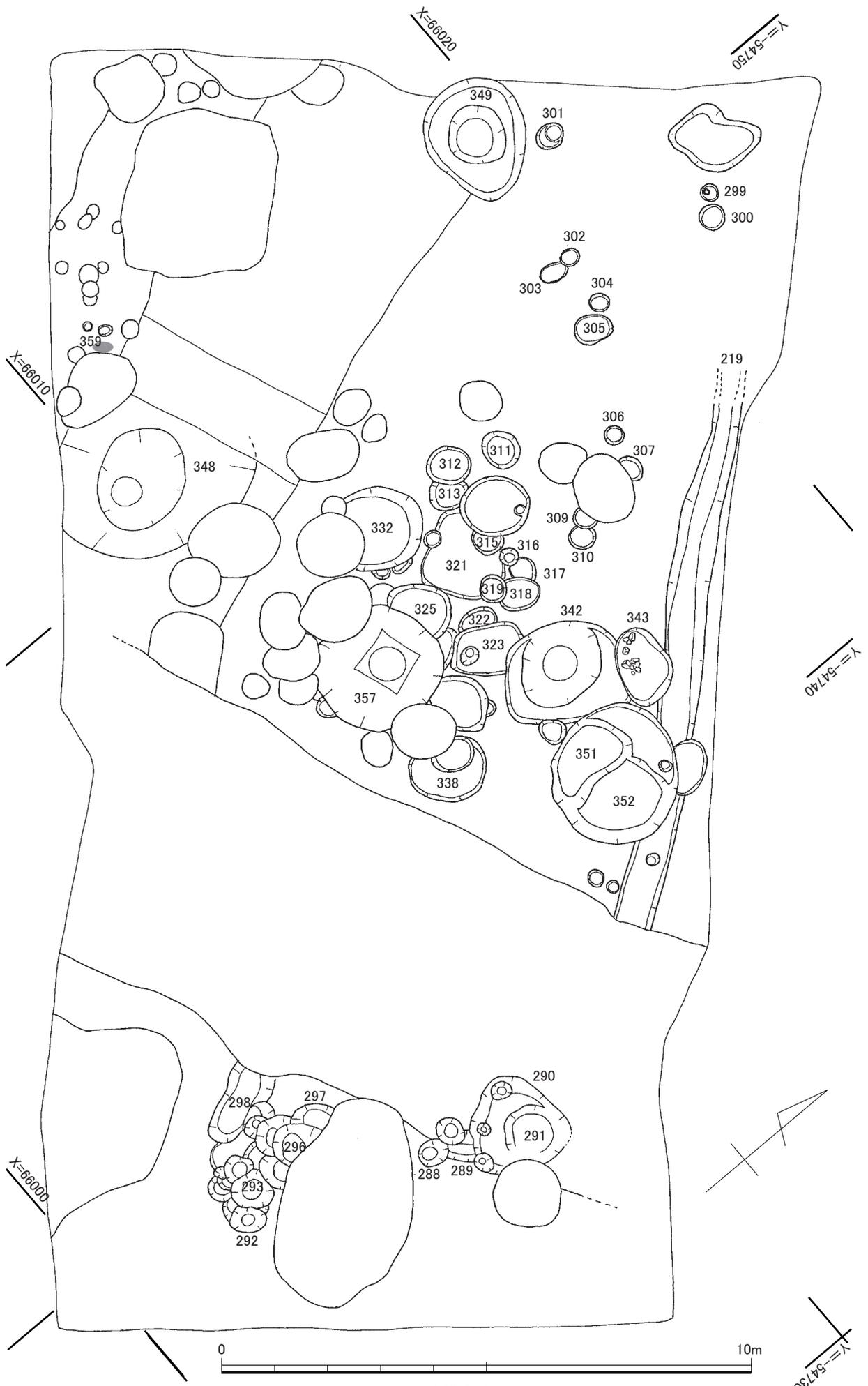


Fig.179 XII区第3面遺構全体図(1/100)

2. XII区の主要な遺構と出土遺物

XII区では、358基の遺構を検出、調査した。以下、主要な遺構と出土遺物について報告する

① 001号遺構

第1面において、XII区の北角から検出した土坑である。長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。土坑内には、炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。埋土中から硅化岩が出土した。硅化岩は、火山の噴気孔において硫黄とともに形成される岩石である（『博多津』博多191、福岡市報第1468集）。

この他、土師器（底部ヘラ切）、白磁碗（玉縁、IV類碗）、楠葉型黑色土器B類碗、黑色土器A類・B類などが出土した。

11世紀後半の土坑であろう。硅化岩の存在から、001号遺構が硫黄貿易と関わりを持っていた可能性が想定される。



Ph.247 XII区001号遺構検出状況(南より)

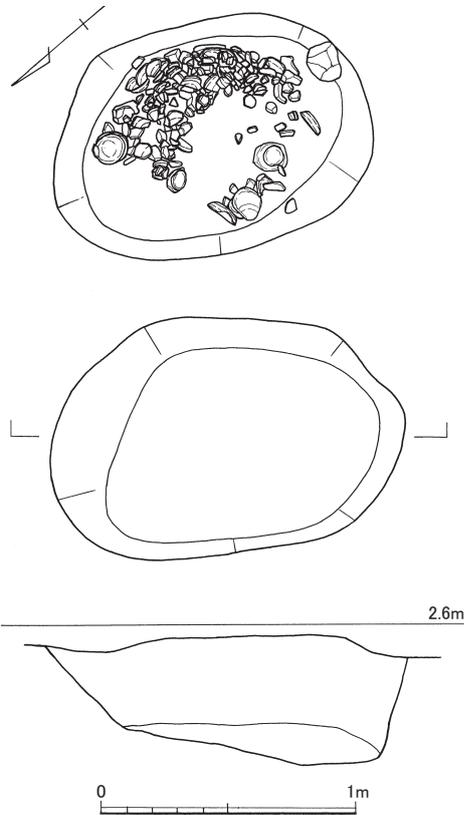
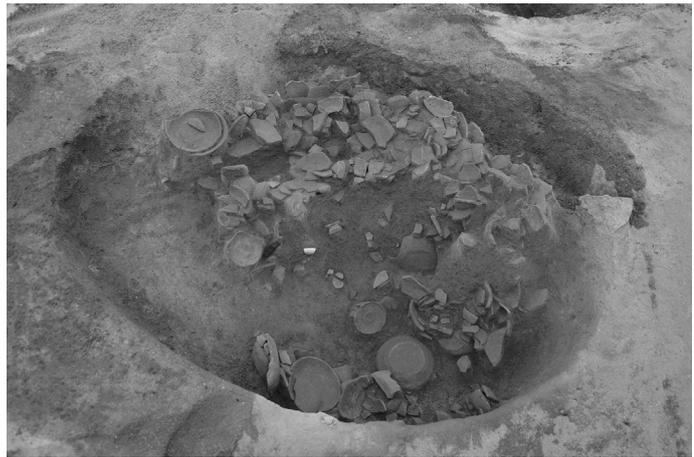


Fig.180 XII区060号遺構実測図(1/30)



Ph.248 XII区060号遺構検出状況(西より)



Ph.249 XII区060号遺構検出状況(南より)

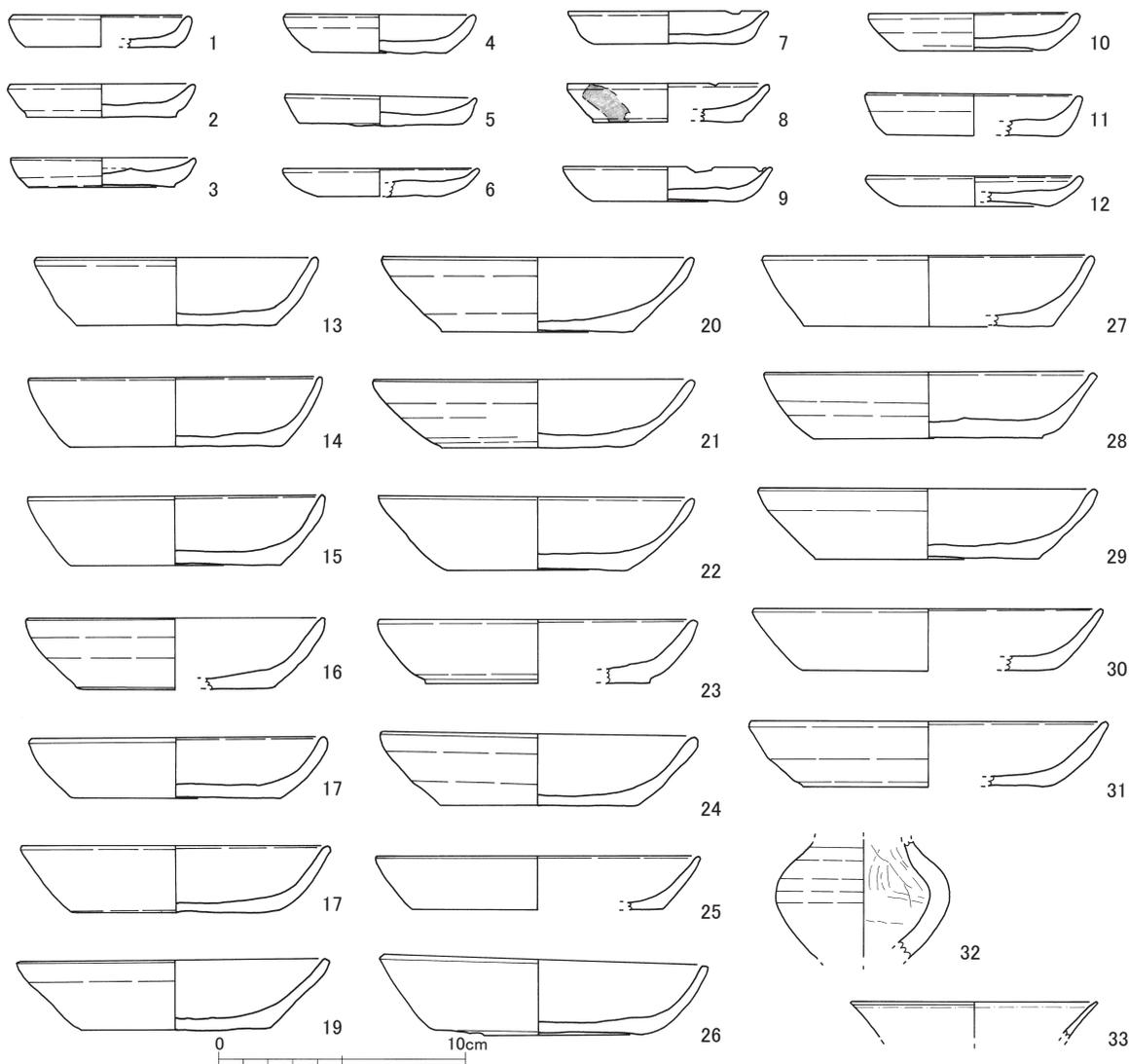


Fig.181 ⅩⅡ区060号遺構出土遺物実測図(1/3)

② 060号遺構

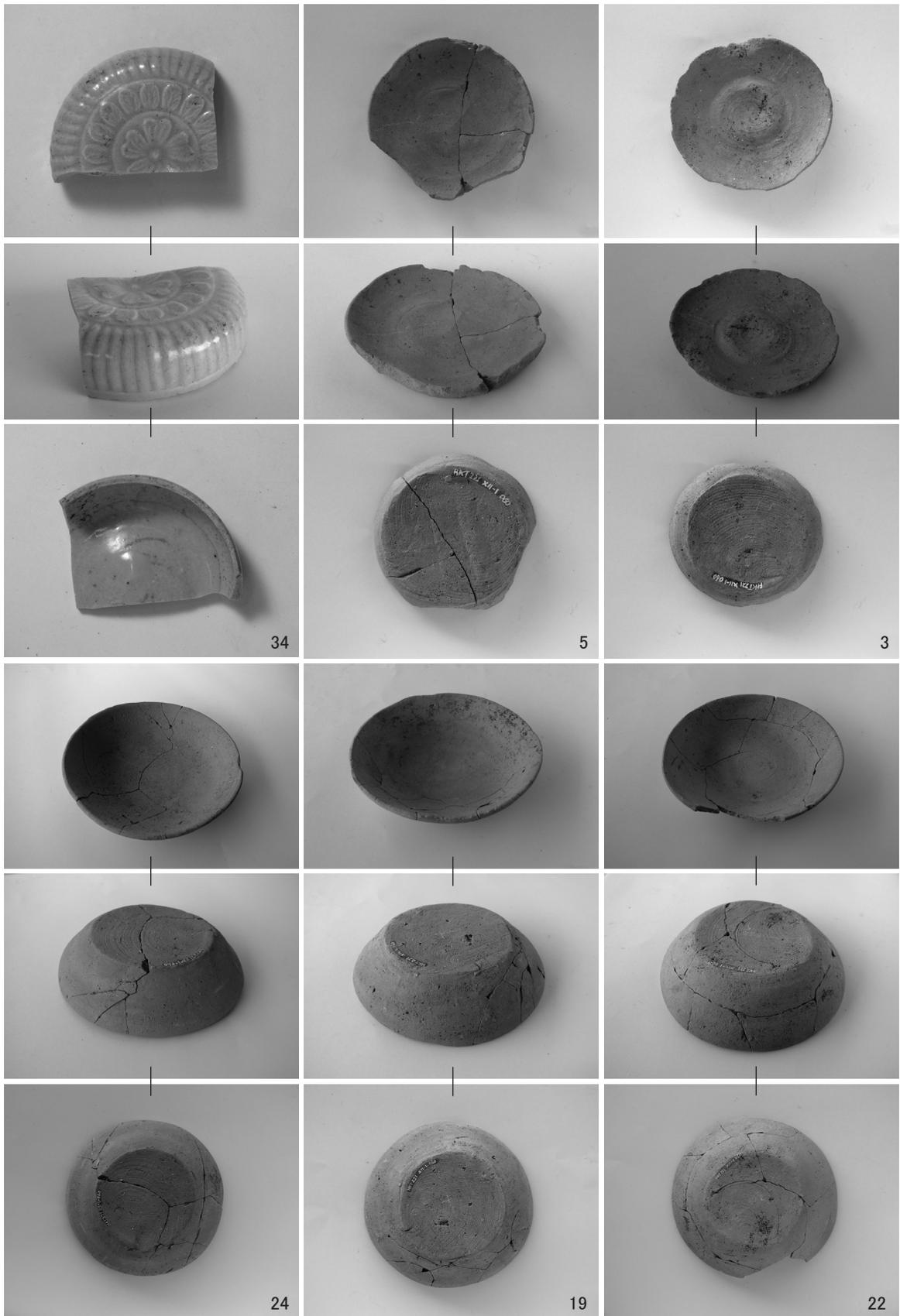
第1面の中ほどから検出した土坑である。西には、235号遺構が、迫っている。長軸1.4m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さは30～50cmを測る。

埋土中に、土師器皿・坏が大量に一括廃棄されていた。土師器は、平面的には、土坑の中央から東壁にかけて最も集中して出土している。これを断面的にみると、東壁に近い部分がレベル的に高く、ほとんど検出面上に接しているのに対し、西壁際の土師器は、ほとんど土坑床面から出土している。すなわち、一括廃棄の土器層は、東から土坑中央にかけて斜めに堆積しており、東側から投棄されたものと思われる。

土師器は全体に焼成がやや甘いようで、取り上げ作業中に破損するものが多かった。

出土遺物をFig.181に示す。1～31は、土師器である。1～12は皿、15～31は坏で、すべて底部は回転糸切りである。32は、須恵器の小壺である。混入品である。33は白磁の皿で、口縁部を口禿にする。この他、瓦質土器すり鉢、青白磁合子 (Ph. 250-34)、青磁 (龍泉窯系・同安窯系) などが出土している。

14世紀前半の、土師器一括廃棄土坑である。



Ph.250 Ⅻ区060号遺構出土遺物

③ 139号遺構

第1面の中ほどから検出した円形の土坑である。直径約80cm、深さは20cmをはかる。

土坑の中央から、円形に廻る炉壁が出土した。直径60cm前後の円形に廻り、その中には、礫、倒れ込んだ炉壁片が落ち込んでいた。

出土状況からは、炉壁は現位置を保っているように見えるが、土坑の底面や側壁に被熱した形跡は見られない。また、スラグが全く出土していないのも、この場所での生産に対して否定的にならざるを得ない要因である。

一方、炉壁は、ササ交じりの粗い粘土板を生地として、内側から被熱して灰色に焼きしまった内表面、黒変した胎、全然被熱を感じさせない茶色の土師質部分の三層に分かれている。

この他、近世瓦などが出土しており、近世以降の遺構であることは疑いない。

④ 140号遺構

第1面で検出した配石土坑である。

長辺1.8m、短辺1.4mほどの長方形の土坑に、川原石を方形に並べる。配石はおおむね二つの部分に分かれるようで、南側半分は残りがよく、内法70×40cmの長方形に石を並べている。北半分は、遺存状態が悪いのか、当初からきちんと石を置く必要がなかったのか、石は乱れている。掘方の土坑を共有しているので、一連の遺構と見て大過ないだろう。

土師器、陶器、瓦質土器鉢・火鉢などのほかに、炉壁、鉄滓、木炭などが出土している。

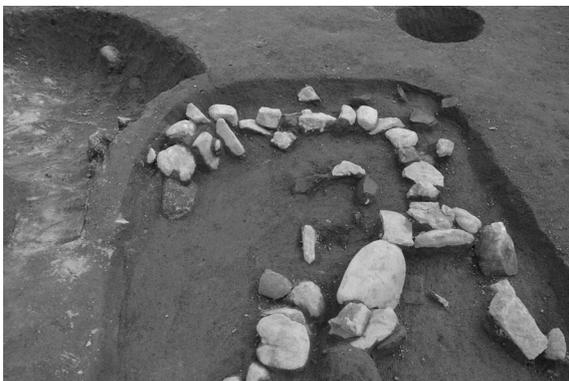
前述の139号遺構とすぐ近接しており、一連の工程を示す遺構として関連付けることができれば、工房の作業場の遺構として興味深い。



Ph.251 XII区139号遺構検出状況(西より)



Ph.252 XII区139号遺構完掘(東より)



Ph.253 XII区140号遺構

⑤ 157号遺構(351・352号遺構)

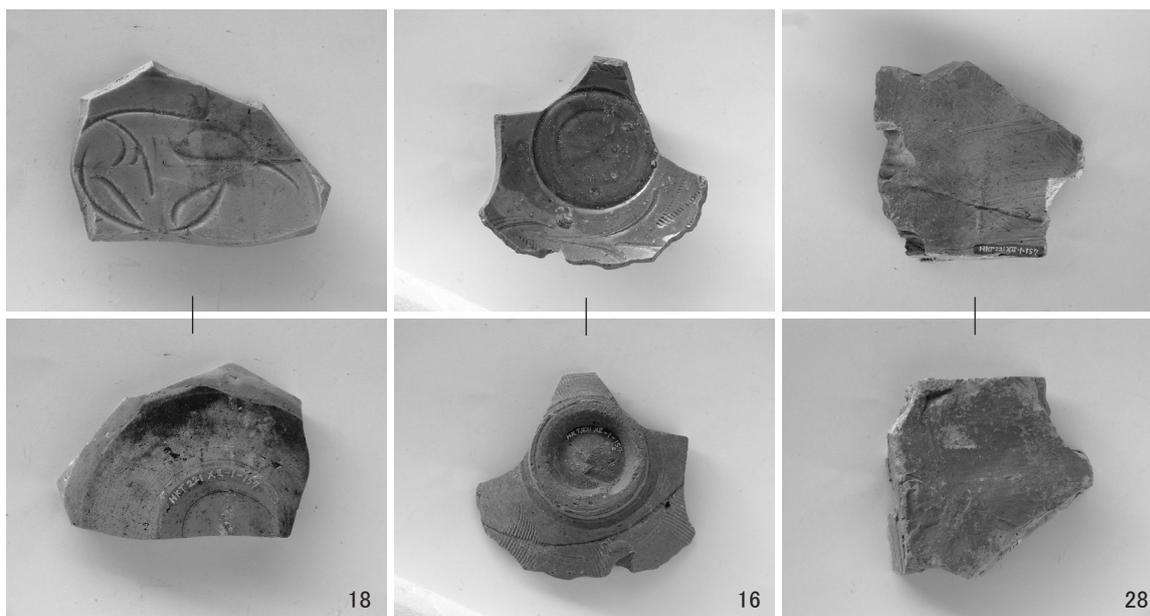
第1面の中ほど、調査区東壁よりで検出した土坑である。第1面調査時には、直径2.2mの円形の大型土坑と認識していた(157号遺構)。第3面調査時に、円形土坑の底を出したところ、楕円形の二つの土坑に分かれた(351号遺構・352号遺構)。この三基の遺構がもともと全く別の遺構で切り合い関係にあったものか。単一の遺構の凹凸に過ぎないのか、掘りあがった時点ではすでに不明となっていた。よって、最上部の遺構である157号遺構の遺物を報告する。



Ph.254 ⅩⅦ区157号遺構(=350、北東より)

出土遺物をFig.182に示す。1～13は、土師器である。1～6は皿で、底部は回転糸切りする。口径が小さくその割に器高が高い1、器高が低く低平な感がある3・4、中間的な(標準的な)2・5・6の三タイプがある。7～12は、坏である。底部は回転糸切りする。7～11は、法量の違いは漸移的で形態的にも差異は認められないが、12は、口径、器高ともに隔絶して大きい。二つのタイプがあるというよりも、12が特殊品と位置付けるべきだろう。13は、甕である。口縁部上面は横方向のハケ目調整、体部内面は横ケズリ、体部外面は頸部にかけて縦方向のハケ目調整をする。14～16は、青磁である。14・15は、龍泉窯系の鎬蓮弁文碗、16は同安窯系の碗である。17～23は、白磁である。17は壺、18・19は皿、20～23は碗である。24・25は褐釉陶器である。24は長頸壺で、頸部内面の上半分から外面は施釉し、頸部下半部分は、露胎となる。26～28は、平瓦である。縄目の叩きを持つもので古代瓦の混入であろう。

157号遺構は、16世紀代の大型廃棄土坑と考えられる。これに対し、351号遺構と352号遺構の遺物は12世紀後半の様相を示している。



Ph.255 ⅩⅦ区157号遺構(=350)出土遺物

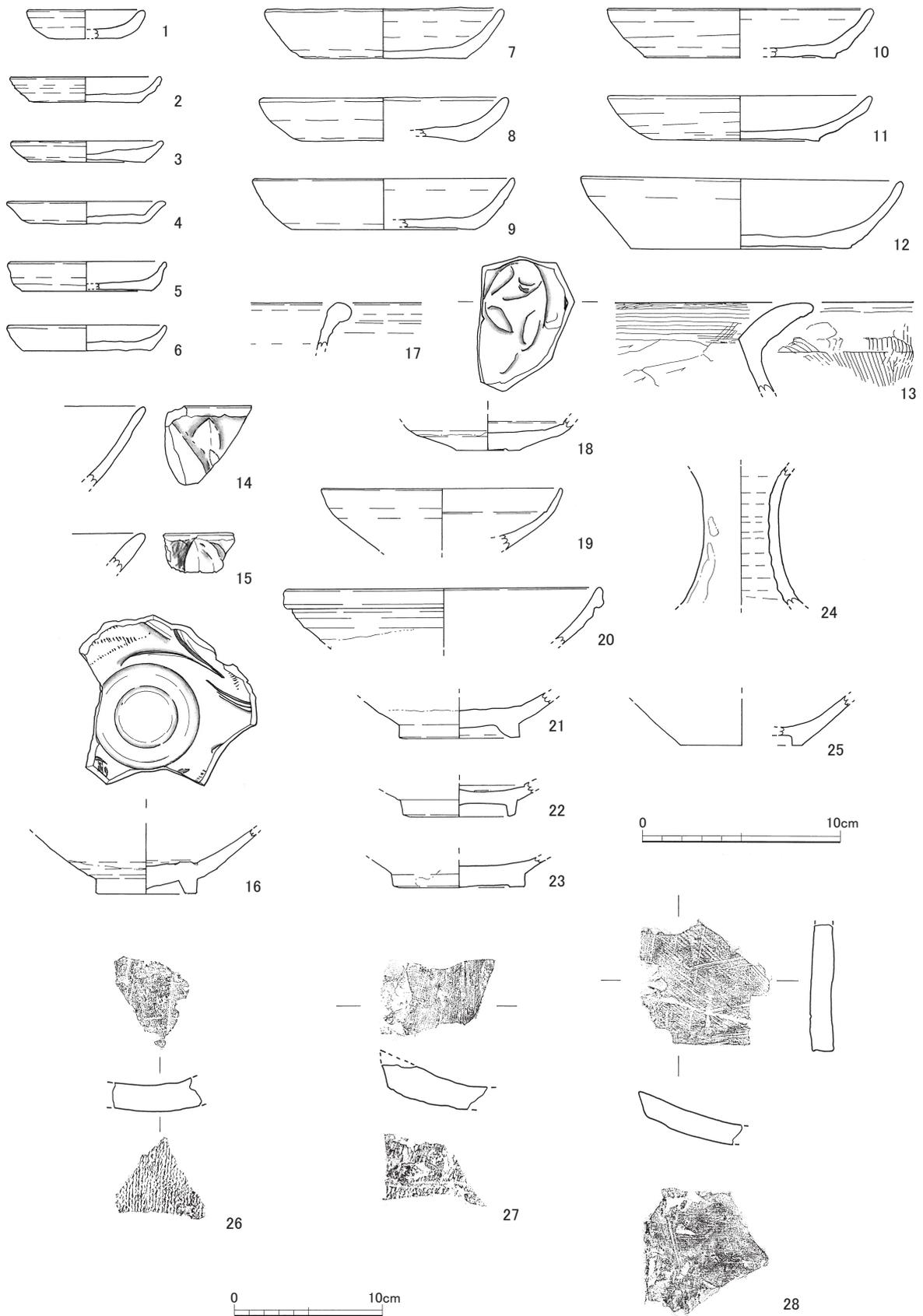


Fig.182 XII区157号遺構(=350)出土遺物実測図(1/3、1/4)

⑥ 219号遺構

第2面で、東壁に沿って検出した溝である。第2面調査時には底を掘り上げ切っておらず、第3面において調査時に完掘した。

第2面での検出時で溝幅は1.5m、深さは、両調査面を総合して45cmほどになる。主軸は、第3面時の方がわかりやすく、それによると真北から40度西偏する。

土師器、黒色土器A類、須恵器、瓦が出土した。

10世紀の溝として大過ないものとする。



Ph.256 XII区219号遺構(第2面調査時、北東より)



Ph.257 XII区219号遺構(第3面調査時、北西より)

⑦ 235号遺構

第2面の調査区西よりを、南北に貫く溝である。幅は、北寄りでは2.2m、土層観察用のベルト部分で2.9m、断面はV字型を呈し、深さは0.9mを測る。主軸方位は、真北から23°30'西偏する。南端付近で東西溝である236号遺構と交差するはずであるが、ちょうどこの部分で233号遺構に切られていて、切り合い関係は観察できなかった。

出土遺物の一部を、Fig.183・184に示す。1～8は、土師器である。1～6は底部を回転糸切りする皿で、小型で高さがある1～4と、大きくて器高が低い5・6の二タイプがある。7・8は、皿・坏だが、底部をヘラ切りしており、混入品か。9は、須恵器の高台坏である。10は灰釉陶器の皿で、

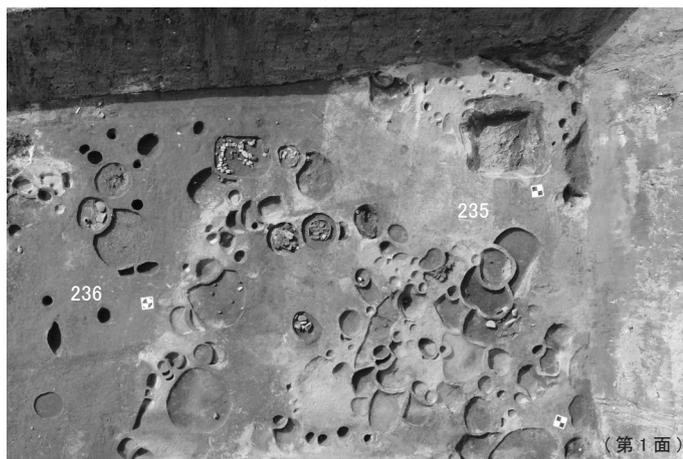


Ph.258 XII区235号遺構断面(北より)



Ph.259 XII区235号遺構(北より)

口縁部である。11は、高麗青磁の碗である。全面施釉で、見込みと畳付きに重ね焼きの目跡が残る。12は、青白磁である。純白の胎土に、青みを帯びた、光沢が強い透明釉をかける。高台と内面は露胎だが、内面には、重ね焼きの目跡が見られる。香炉であろうか。13～24は、白磁である。13・14は皿、15～24は、碗である。16・17・19は、非常に薄く作られており、優品であろう。25は青磁の小壺である。26は、青花の碗である。27も青花であろうか。釉は二次的に被熱して失透しているが、呉須による施文がうかがわれる。28は、無釉陶器の捏ね鉢である。29～30は、土鍋である。内面は密に横ハケ調整する。32・33は、土師器の、甕の口縁である。口縁部内面は横ハケ調整、外面は縦に刷毛目調整する。34～39は、瓦質土器である。34～37は、鉢である。34には、内面に、わずかだが、摺り目が認められる。すり鉢であ



(第1面)



(第2面)

Ph.260 ⅩⅡ区235号遺構検出状況(北東より)



Ph.261 ⅩⅡ区235号遺構出土遺物

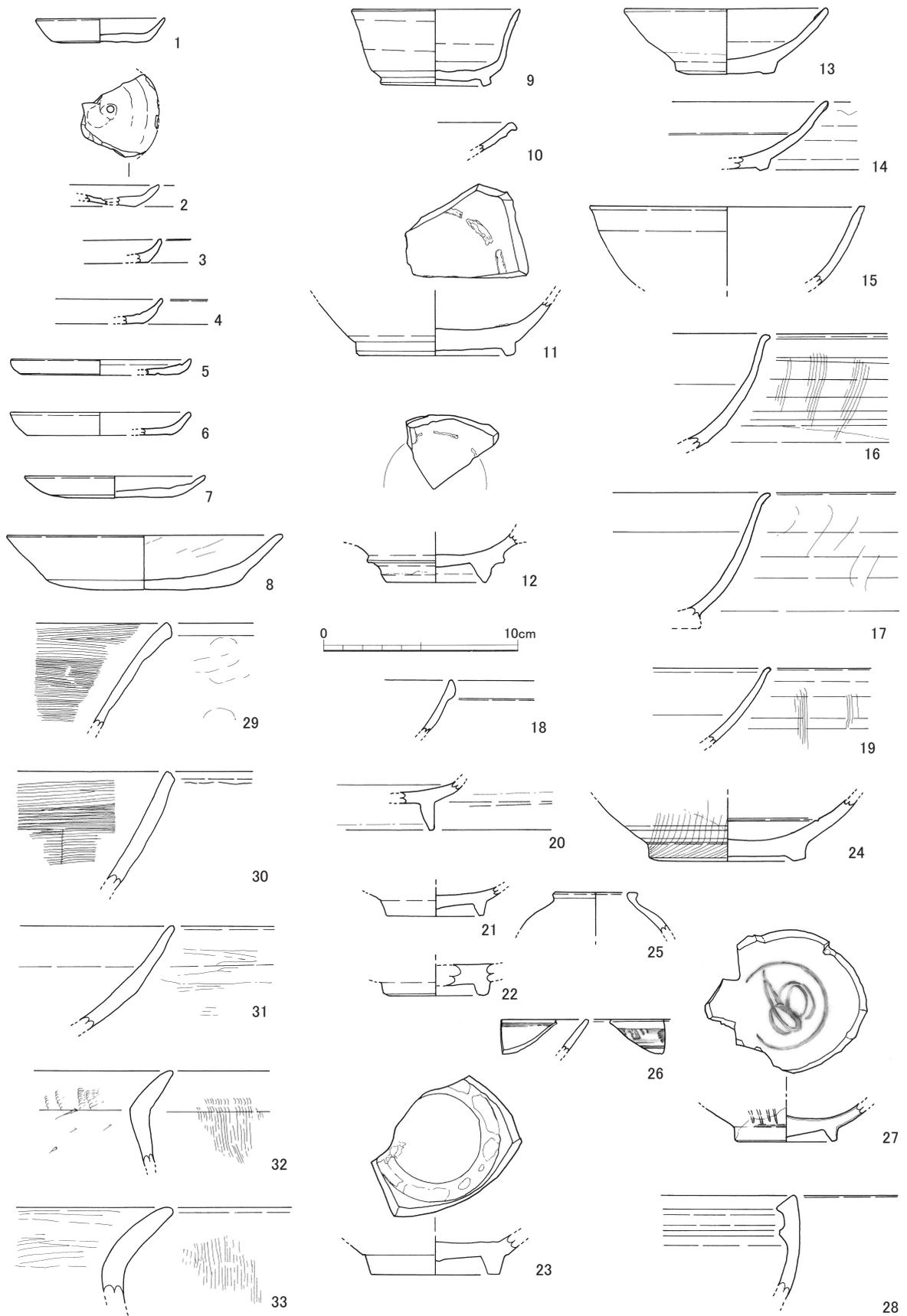


Fig.183 Ⅻ区235号遺構出土遺物実測図1(1/3)

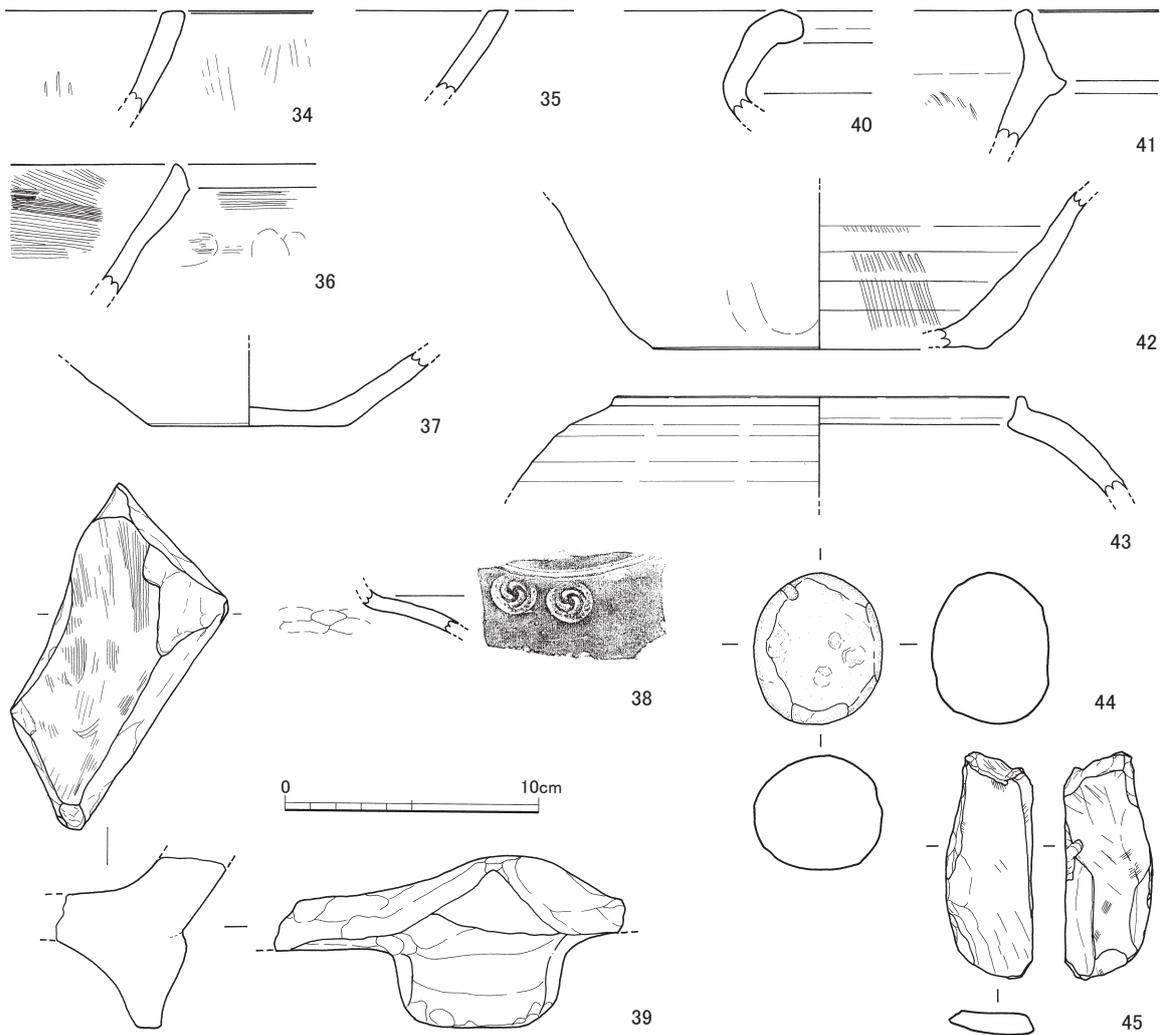


Fig.184 XII区235号遺構出土遺物実測図2(1/3)

る。35は、34と同様の鉢の破片で、遺存部位には摺り目は看取できないが、恐らくすり鉢であろう。36は、捏ね鉢である。内面は密に横ハケ目調整する。外面の口縁部直下は横ナゲ調整するが、下位の部分には指頭圧痕が並ぶ。38は、湯釜の頸部付近であろう。三つ巴文のスタンプが並んでいる。39は、火鉢の足の部分である。おそらく、三方に足がついたものと推測される。40～43は、備前焼である。40は、壺の口縁で、若干外方に肥厚している。41はすり鉢の口縁部である。内面には、ほんの僅かではあるが、すり目がみとめられる。42は、すり鉢の底部で、体部下位には、楕状工具によるすり目がみとめられる。43は、水指であろう。44・45は、石製品である。44は、砂岩の石玉で、投弾であろう。45は、安山岩性の砥石である。

235号遺構は、16世紀の溝であろう。

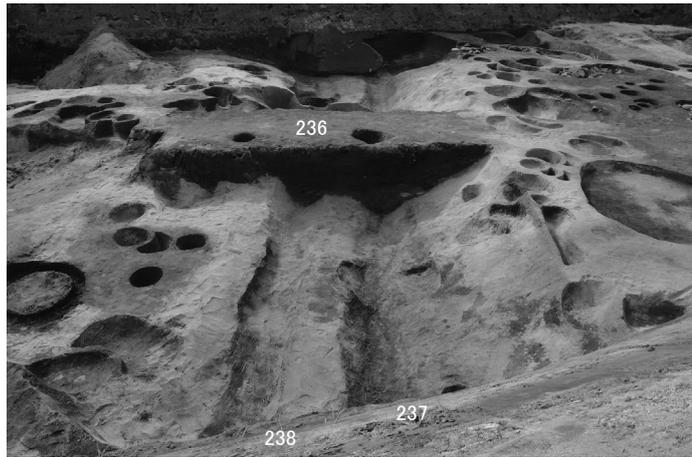
⑧ 236号遺構・237号遺構・238号遺構

第2面を東西に貫く溝である。第1面遺構検出時から溝の形は見えていたが、第2面で調査したもので、溝全体を大きくとらえたものが、236号遺構である。

その後、これが二条の溝の重複であることがわかり、北側の溝を237号遺構、南側の溝を238号遺構とした。

236号遺構の調査に当たっては、幅が約5.5mと広いこと、ぼんやりとはあったが、北と南とで埋土に違いが見えた点などから、複数の溝の重複を疑った。そこで、まず遺構の中央にトレンチを設定して重機で掘削し、二条の大型の溝が切り合っていることが判明した（237号遺構が238号遺構を切る）。同時に、溝の埋土がきわめて類似しており、これを掘り分けるのは困難であることが判明した。そこで、平面的に分別可能になるまで、236号遺構として一律に掘り下げ、掘り分けが可能になったところで、別の遺構として調査した。

まとまった量の遺物は得られなかったが、出土遺物からみて、238号遺構は13世紀以降、237号遺構は14世紀以降の溝と思われる。



Ph.262 XII区236・237・238号遺構(北東より)



Ph.263 XII区236・237・238号遺構断面(北東より)

⑨ 320号遺構

第3面の中央付近、遺構の切り合いが激しかった部分から検出した土坑である。長辺1.4mほどの円形を呈し、検出面からの深さは、40cm程度をはかる。埋土中位より、完形の土師器等が出土した。

出土遺物を、Fig.185に示す。1～21は、土師器である。すべて外底部を回転糸切りする。1～3は皿、4～21は坏である。底部は回転糸切りする。4～20は、法量の違いは漸移的で形態的にも差異は認められないが、21は、口径、器高ともに隔絶して大きい。二つのタイプがあるというよりも、21が特殊品と位置付けるべきだろう。22は、龍泉窯系青磁の碗である。23～25は、陶器である。23・24は、鉢である。25は、無釉陶器の捏ね鉢である。26は、瓦質土器



Ph.264 XII区320号遺構(南より)

の火鉢である。口縁部片と底部片の二片が出土している。口縁はいくつかに分割して歪ませ、輪花に作る。口縁部直下には、菊花のスタンプを押す。器面は丁寧にヘラ磨きをする。

土師器皿・坏の特徴から、14世紀前後の遺構である。

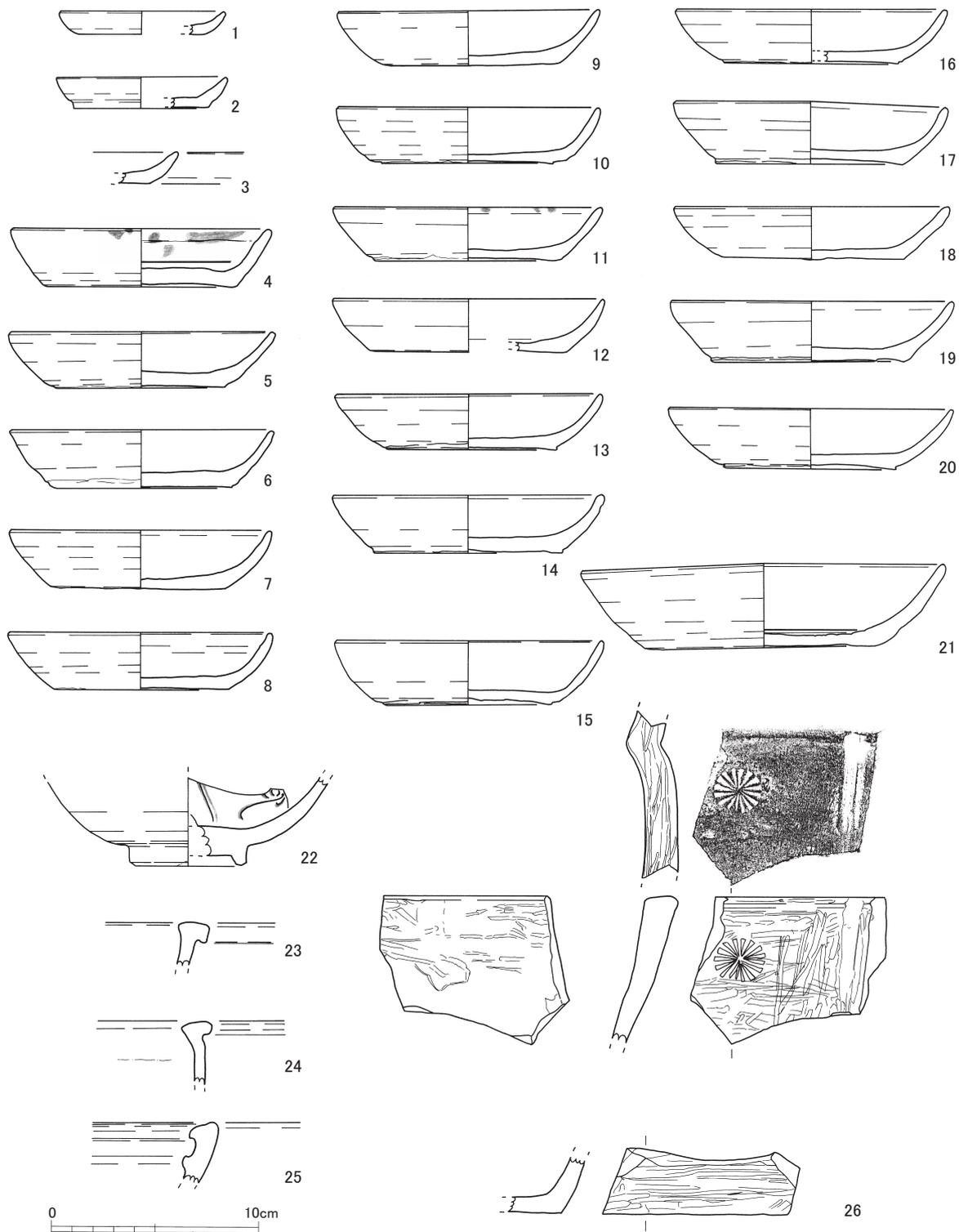
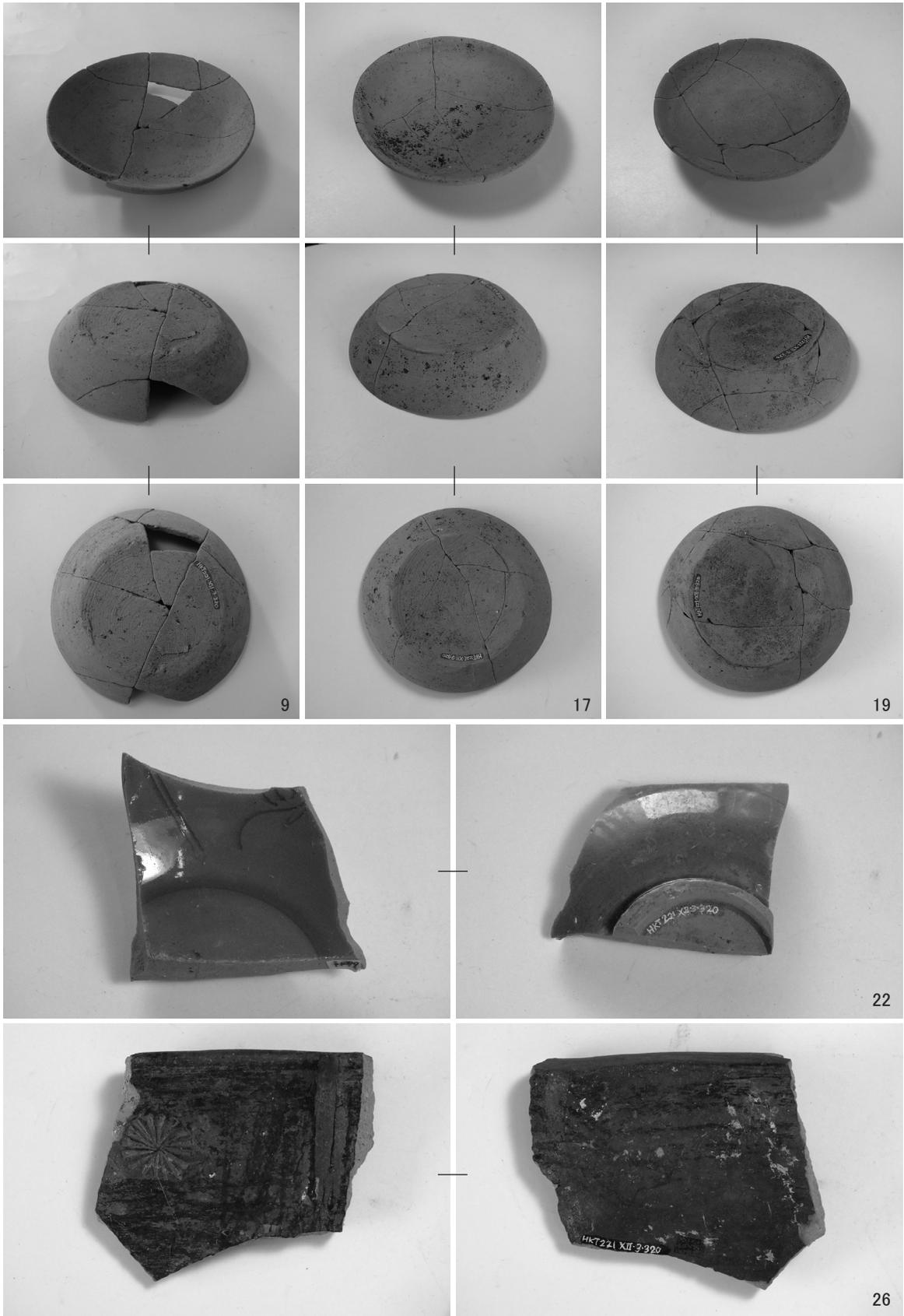


Fig.185 ⅩⅨ区320号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.265 Ⅻ区320号遺構出土遺物

⑩ 332号遺構

第3面の中ほどより検出した土坑である。第1面の132号遺構に切られ、南端を失う。

径1.6mの円形を呈し、検出面からの深さは50cmを測る。埋土中より土器・陶磁器等がまとまって出土した。

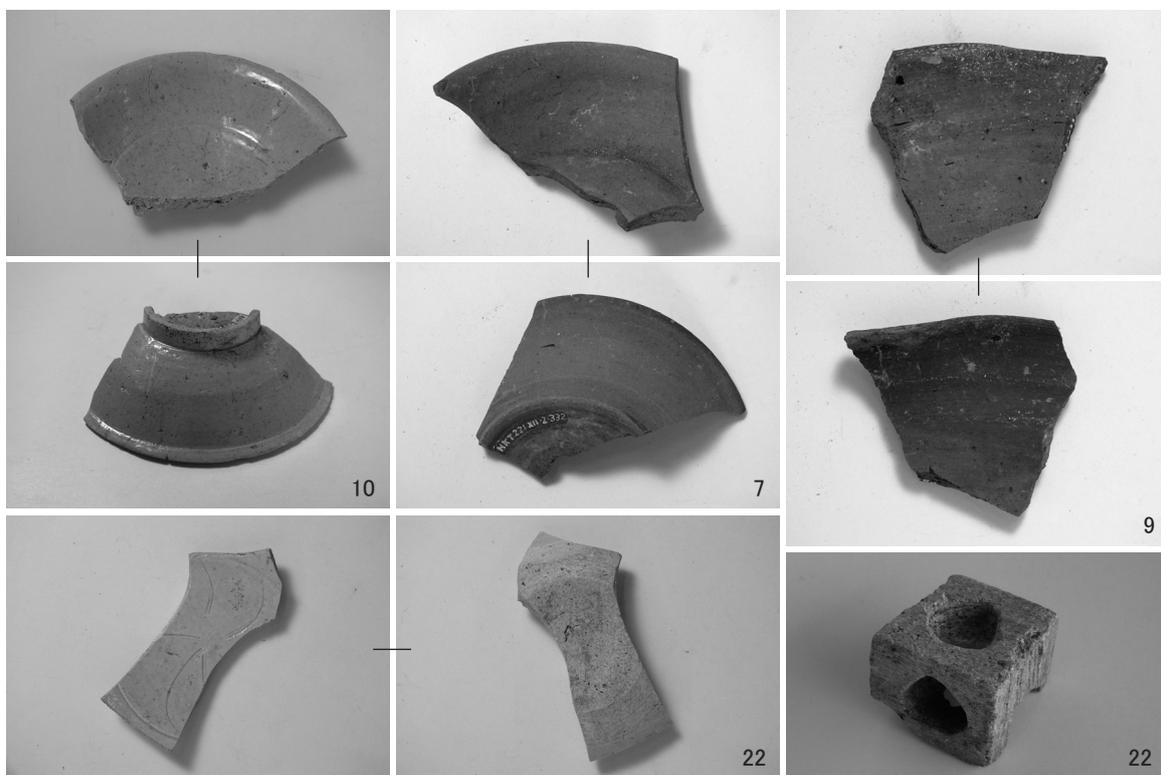
出土遺物をFig.186に示す。1-5は、土師器である。黒色土器A類の碗である。高台は低いが、径は広く、外方に踏ん張る。7-9は、須恵器である。7は高台坏、8は壺の底部であろう。9は、鉢の口縁である。口縁端部の一部を歪ませて、片口に作る。10-15は、白磁である。10は、高台付の皿である。11-15は、碗である。12・14は、体部外面にワラビ手様の沈線文を垂下させる。13は、4条単位の櫛描き文を垂下させる。16は無釉陶器の捏ね鉢である。17-19は、土師器の甕である。17は、口縁内面を横ハケ調整し、体部内面は横方向のケズリ、体部外面は粗く縦ハケ調整をくわえる。19の体部外面は、きめ細かい縦方向のハケ目を密に施す。

20・21は石製品である。20は円筒形の砂岩で、叩き石を思わせる。21は、大型の砥石である。粘板岩製。

12世紀前半の廃棄土坑である。



Ph.266 ⅩⅨ区332号遺構(北西より)



Ph.267 ⅩⅨ区332号遺構出土遺物

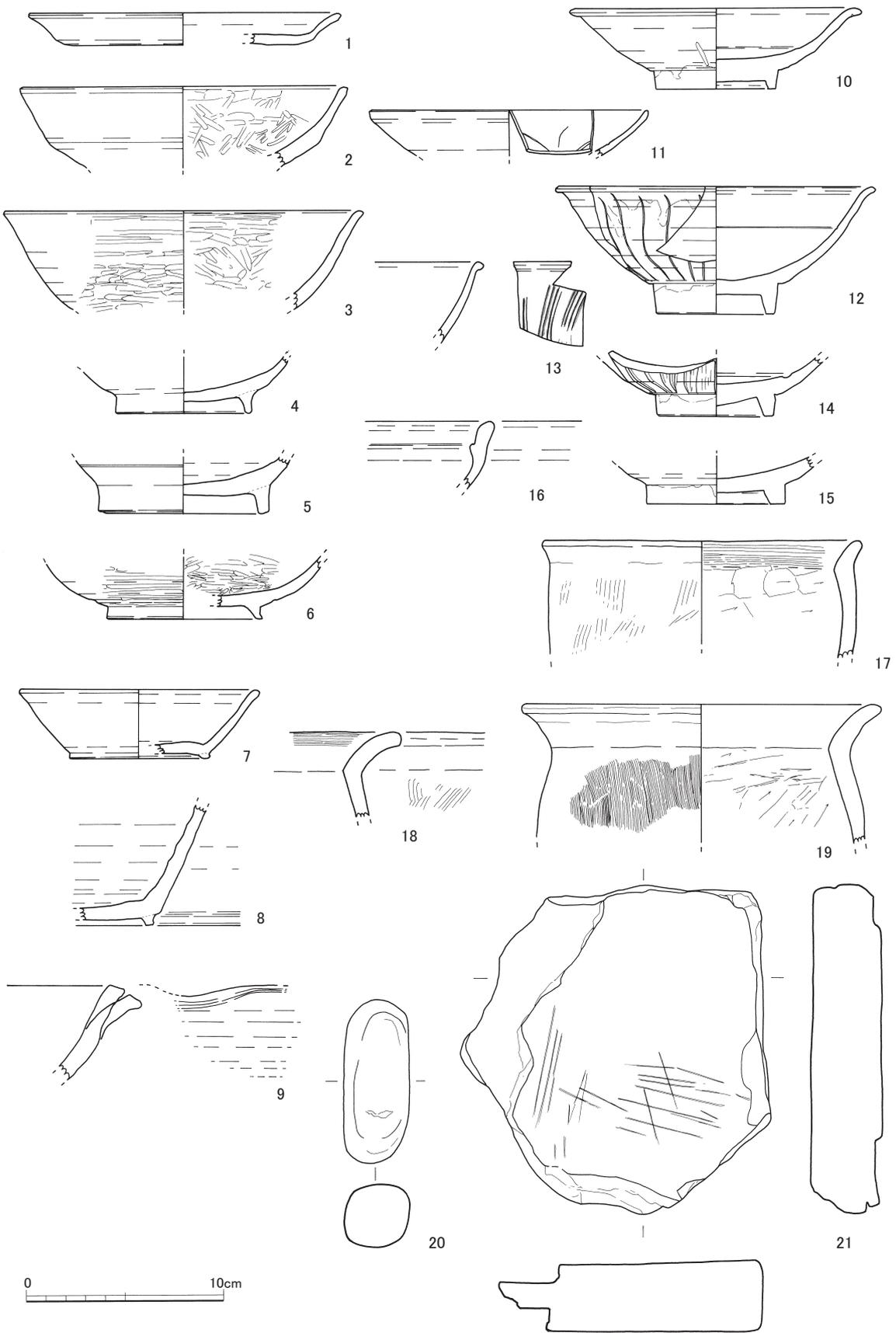


Fig.186 XII区332号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑪ 342号遺構

第3面の中ほど、東辺よりで検出した井戸である。

長軸2.2m、短軸1.7mほどの楕円形を呈し、その中央に径70cmほどの曲げ物を据えて、井側とする。湧水のため、水溜の有無、最下部の形状などの詳細は不明である。

出土遺物を、Fig.188に示す。1～4は、土師器皿である。底部は、回転糸切りする。5は、瓦器碗である。底部押し出しによる成形で、筑前型瓦器に当たる。内外面とも、幅の広いヘラ磨きを密に行う。6は、青白磁の合子である。蓋を欠く。7～13は、白磁である。7は平底皿である。8～13は碗である。13は、体部を丁寧に打ち欠いて、いわゆる瓦玉状に加工する。14～17は青磁である。15・16は同安窯系の碗である。14・17は龍泉窯系青磁である。17も、13と同様に周囲を打ち欠いて瓦玉とする。18～25は中国陶器である。18・19は、褐釉の盤である。胎土は、白ベージュ色のきめ細かいもので、器壁は薄く作られている。20・21は、壺・もしくは甕の底部である。23～25は褐釉陶器の壺である。23は口縁で、締まった頸部から丸く折り返して、玉縁状に収める。24・25は、底部である。24は平底、25は内側を大きく削り込む。25の体部外面には、釉垂れが見られる。26・27は石製品である。26は、石鍋の口縁部である。滑石製。口縁部下に、削り出しの鏝が廻る。外面には薄く煤が付着している。27は、石鍋の転用品である。石鍋片を縦にとったもので、外面に鏝を削り落とした痕跡が、内面には底部に屈曲したなごりを見て取ることができる。しかし、何を作ろうとしたのか、いまひとつ判断がつかない。一方に摘みのような突起を削りだしているが、紐かけでも作ろうとしたものであろうか。形状的に最も近いのは、温石であろうが、摘みや紐かけを持った温石の事例は管見の限りでは思い当たらない。

このほか、古代の瓦、焼き塩壺、鉄滓などが出土している。

12世紀後半の井戸と位置付けられる。

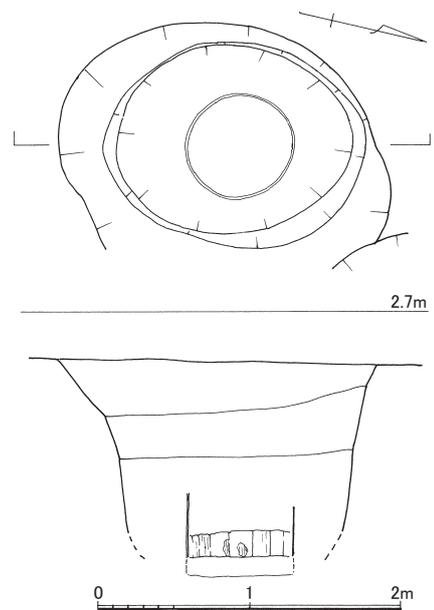


Fig.187 XII区342号遺構実測図(1/50)



Ph.268 XII区342号遺構(北より)



Ph.269 XII区342号遺構井側検出状況(北より)

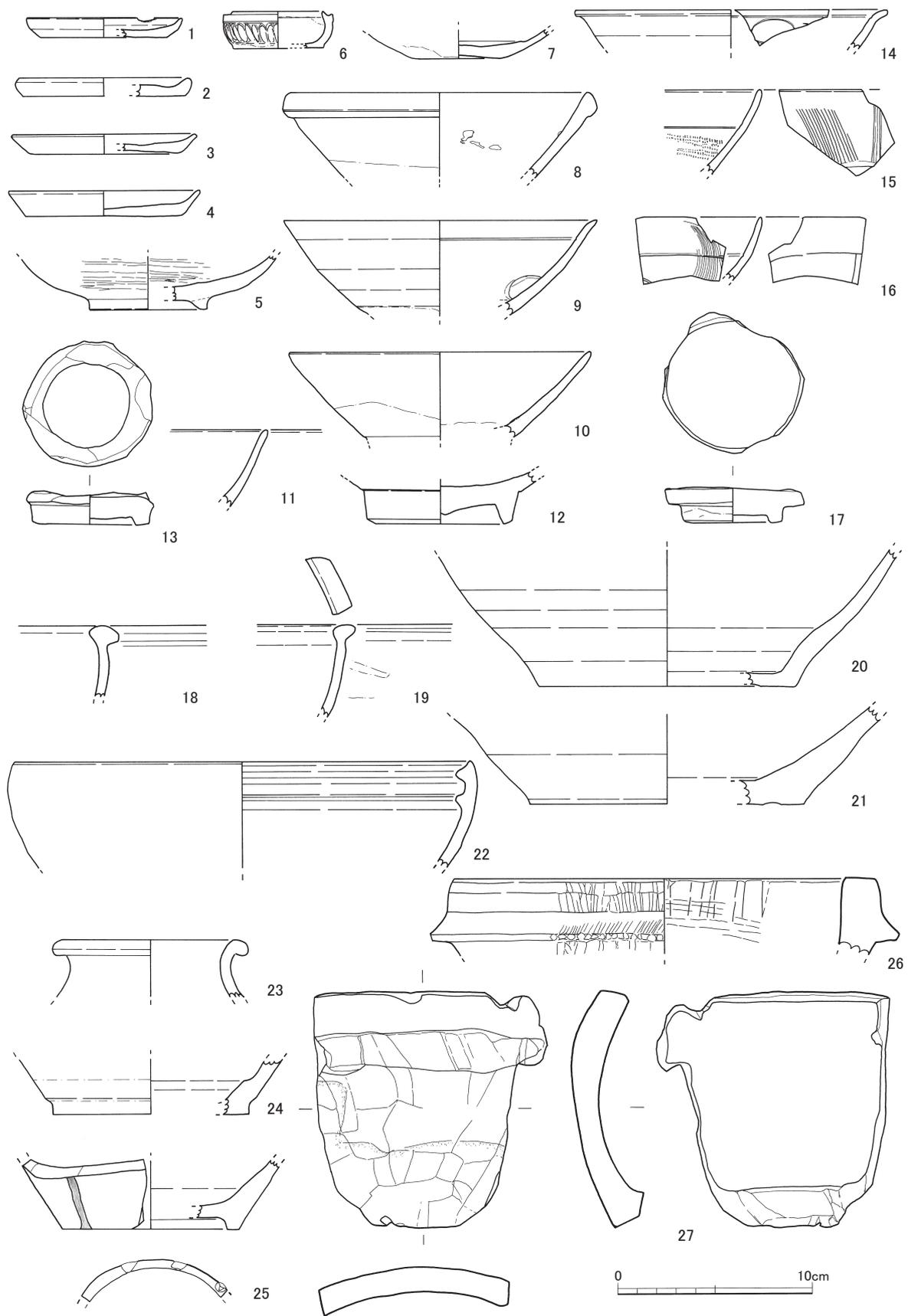
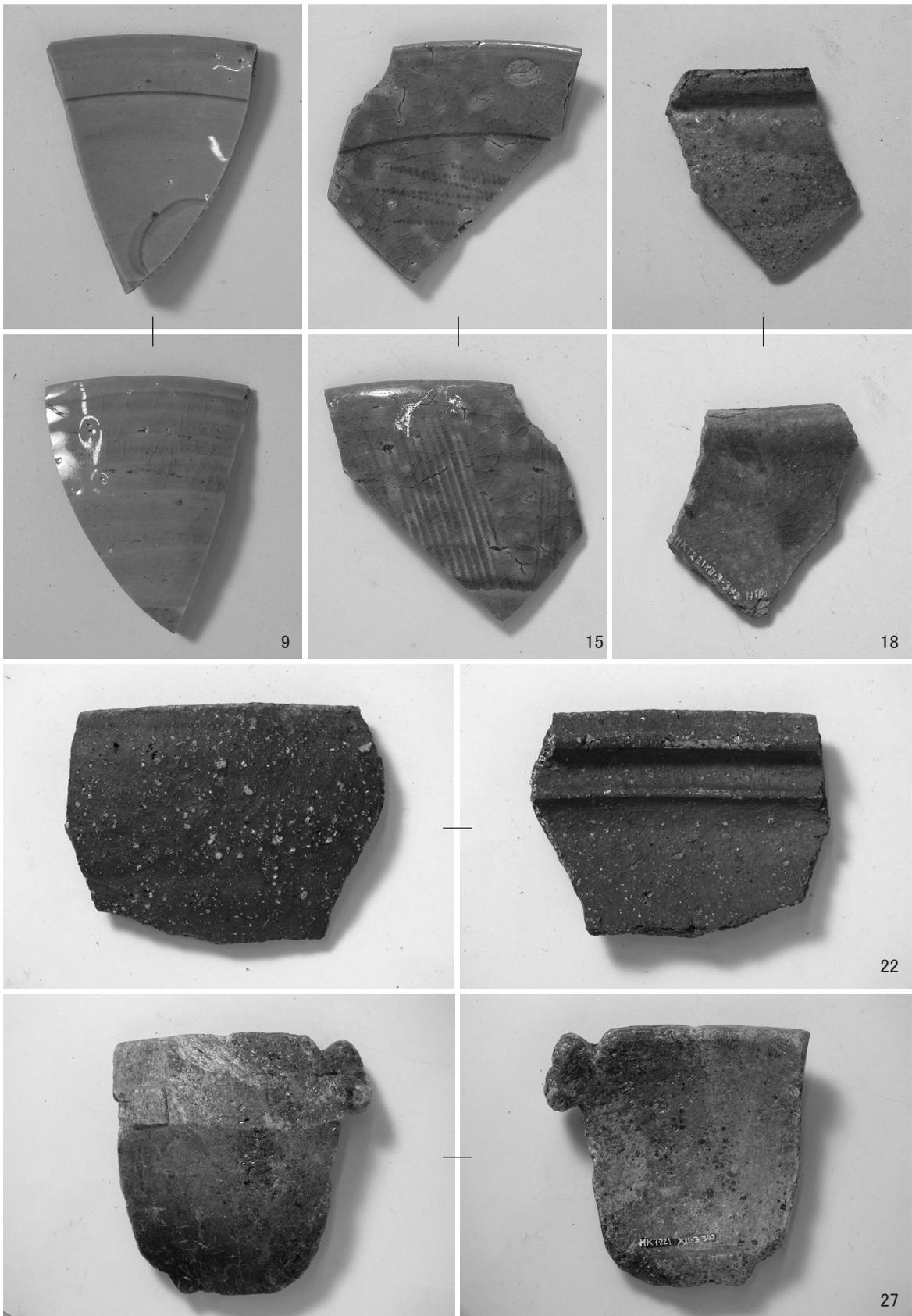


Fig.188 Ⅺ区342号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.270 ⅩⅡ区342号遺構出土遺物

⑫ 348号遺構

溝遺構である235号遺構の底面から検出した井戸である。

その掘方を含めて、ほとんどの部分がすっぽりと235号遺構の内に入ってしまった。

長軸4.0m、短軸3.5mの楕円形を呈する掘方を持ち、その中央から南寄りに直径55cmの結び桶を据えて井側とする。じつは、精査の過程で、井側の可能性を持つ土質の変化が、二か所検出された。円形のプランが二つ並んで現れたのである(Ph.271)。どちらが井側になるのか判断がつかず、掘り下げてみて木質が出土した方を井側とした。湧水のため、水溜以下の確認はできなかった。

出土遺物の一部をFig.189に示す。

1は、楠葉型瓦器碗である。内面は密に横へら磨き、外面は隙間の大きい粗いへら磨きが施されている。

2は、灰釉陶器の皿である。高台ははがれているが、器壁が薄く、高台径が広いことから、比較的早い段階の製品ではないかと考える。薄いテリのような釉が刷毛塗りされている。3は、高麗青磁の皿である。きめ細かい良質な胎土から薄い体部を成形していて、精品である。胎土は暗灰色で、ややがさついて見えたので、高麗青磁と判断したが、越州窯系有青磁の可能性も考えられる。

このほか、土師器皿・坏(底部へら切り、糸切り)天目碗、などが出土している。図示した遺物は古めのものが多いが、12世紀前半を考えるのが妥当であろう。

⑬ 349号遺構

第3面北辺の中ほどより検出した土坑である。235号遺構(溝)に切られる。

掘方は長軸2.4m、短軸2.0mを呈し、深さ95cmを測る。その中央は、径1.1mの略円形にくぼんでいた。調査時点では、二段に掘られていたところから井戸と考えたが、井側の出土はなく、底面の標高的にも井戸と断定することは出きないと考えている。とりあえず、大型の廃棄土坑と考えておく。

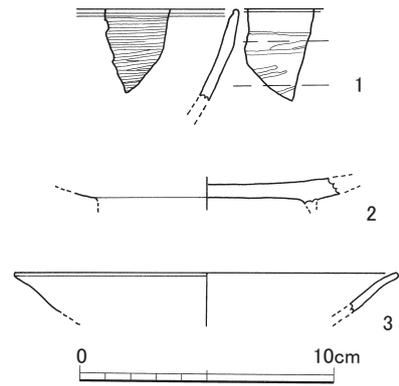
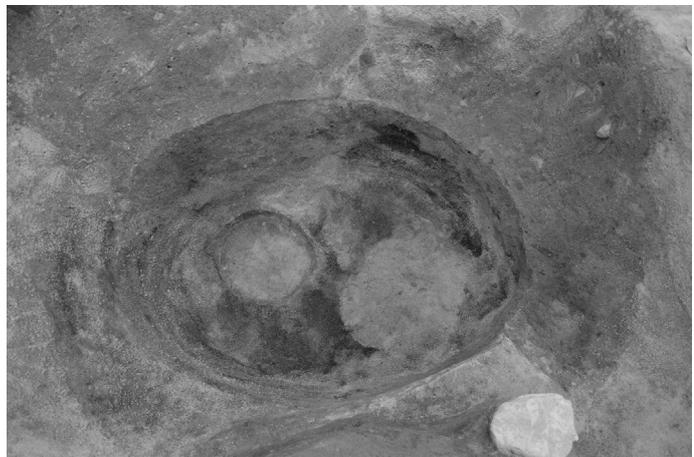
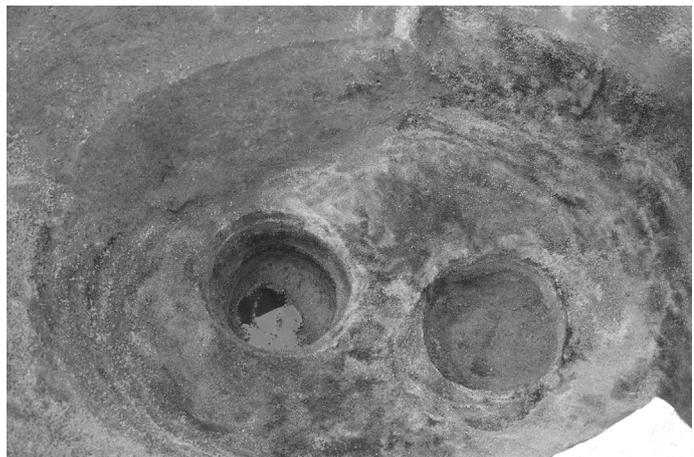


Fig.189 ⅩⅨ区348号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.271 ⅩⅨ区348号遺構井側確認時(北東より)



Ph.272 ⅩⅨ区348号遺構完掘状況(北東より)

出土遺物は、土師器（糸切り、ヘラ切）、瓦器、白磁、陶器等である。12世紀前半の土坑と考えると大過ないだろう。

⑭ 357号遺構

XII区第3面のほぼ中央部分から検出した井戸である。遺構の重複が激しい中で、最下部分に当たる遺構であった。

径約2.5mの隅丸方形かがった円形の掘り方を持ち、その中央やや北寄りに井側を設ける。井側は方形板組で、一辺は約1m、深さ10cmほどが遺存していた。木質の観察から、長さ1mの板材を横に用いたものと判明した。井側の中央に円筒形の水溜を据える。水溜は径70cm、深さ40cm以上のおそらく曲げ物を用いたものである。湧水のため標高0.2m以下の確認はできなかった。第3面の検出面から確認できた限りの最下部までの深さは1.8m前後である。

出土遺物をFig.191・192に示す。1～12は、土師器である。1～5は皿で、底部をヘラ切りする。口径が大きい割に器高が低く、器壁が厚い、扁平な感じの皿が多いのは特徴的である。9は底部糸切りの皿である。6～8は、底部ヘラ切りの丸底坏である。内面はコテ当てして平滑に整える。10・11は、底部糸切りの坏である。12は、土師器碗の底部である。内底部はヘラ磨きする。13は、古代の土師器である。体部は緩くS字を描くように立ち上がり、内側に小さく曲げて口縁を作る。内外面ともにヘラ磨きする。14は、須恵器の甕の口縁である。15は、黒色土器A類碗である。内面は密にヘラ磨きするが、外面は横ナデ調整が主である。16～21は、白磁である。22は、陶器の壺の底部である。23は、土師器の甕である。内外面とも、密に横方向のハケ目調整を行う。24は、東播系須恵器の捏ね鉢である。胎土は良好で、神出窯の製品であろう。27も中世須恵器の壺である。生産地不明。

25・26・28・29は、古代の瓦である。25は、鴻臚館式軒平瓦である。26・28・29は、単線斜格子文叩きの平瓦である。いずれも鴻臚館で出土するタイプである。

このほか、高麗系無釉陶器、管状土錘、壁土、鉄滓、木炭などが出土している。

12世紀前半の早い時期の井戸である。



Ph.273 XII区349号遺構(南より)

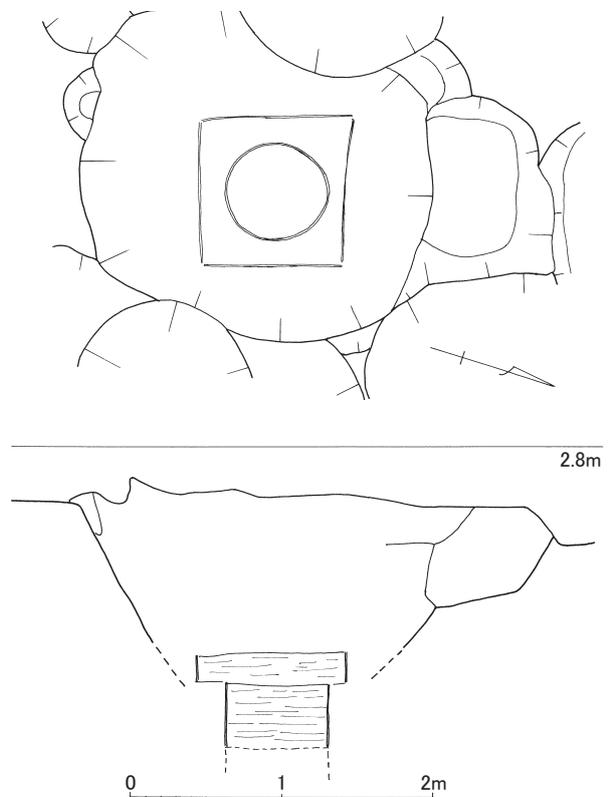


Fig.190 XII区357号遺構実測図(1/50)



Ph.274 Ⅻ区357号遺構(北より)



Ph.275 Ⅻ区357号遺構井側・水溜(東より)



Ph.276 Ⅻ区357号遺構出土遺物

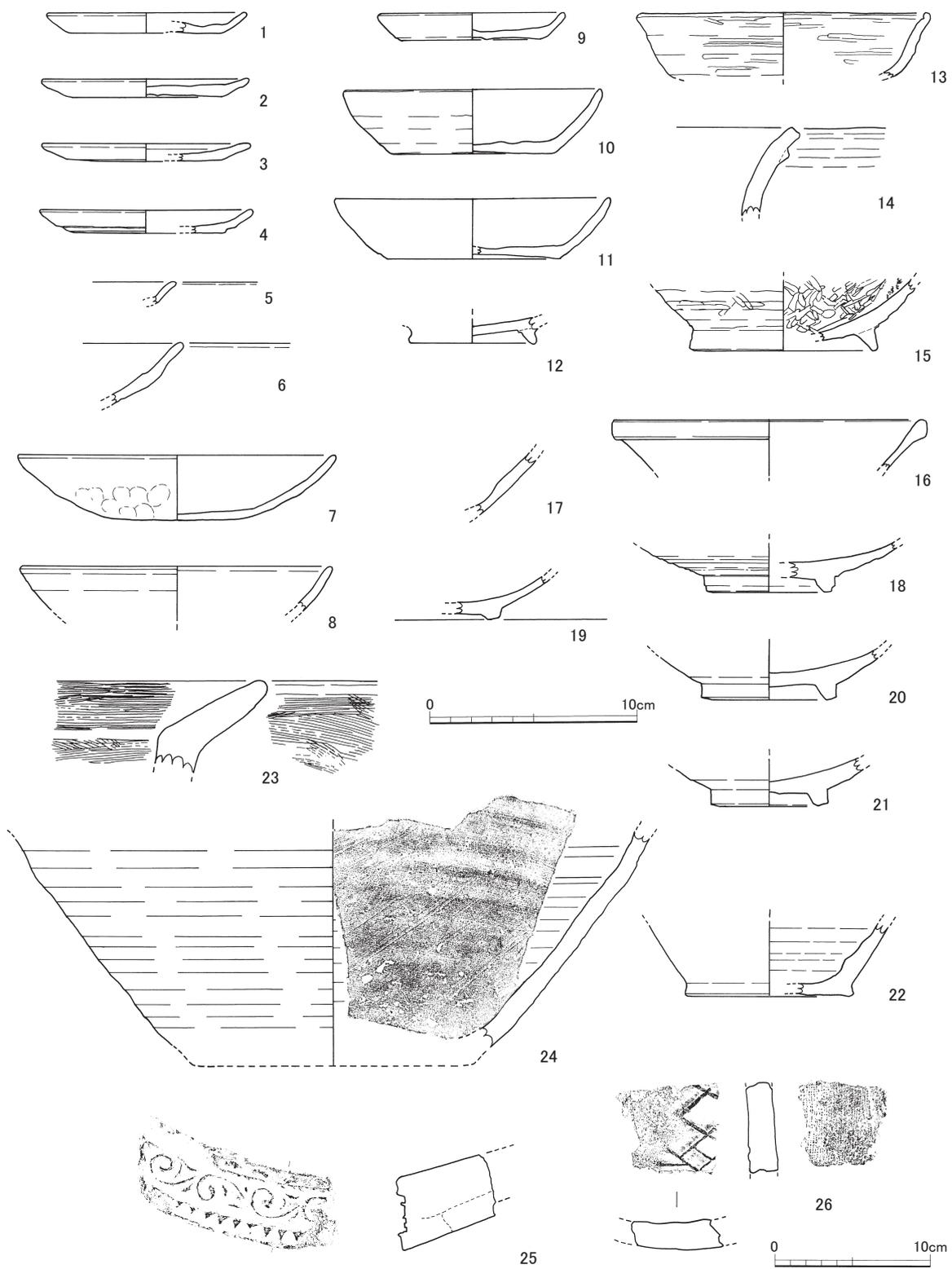


Fig.191 XII区357号遺構出土遺物実測図1(1/3、25・26…1/4)

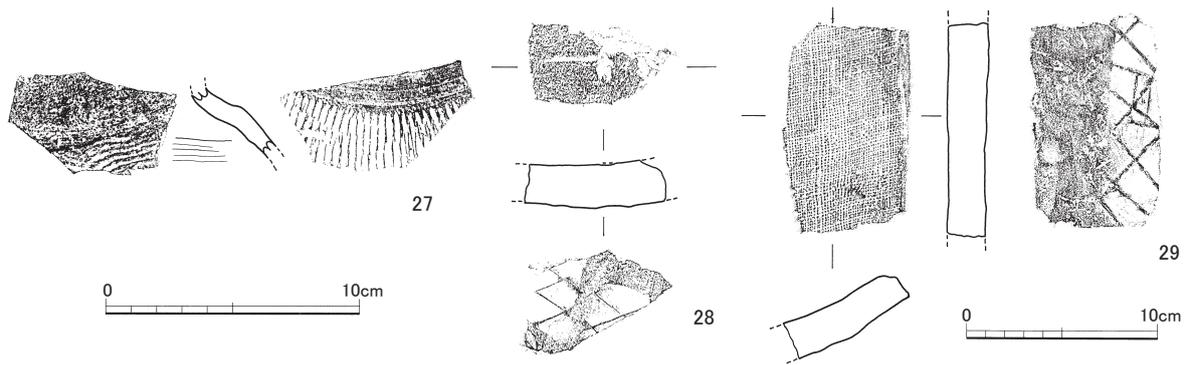
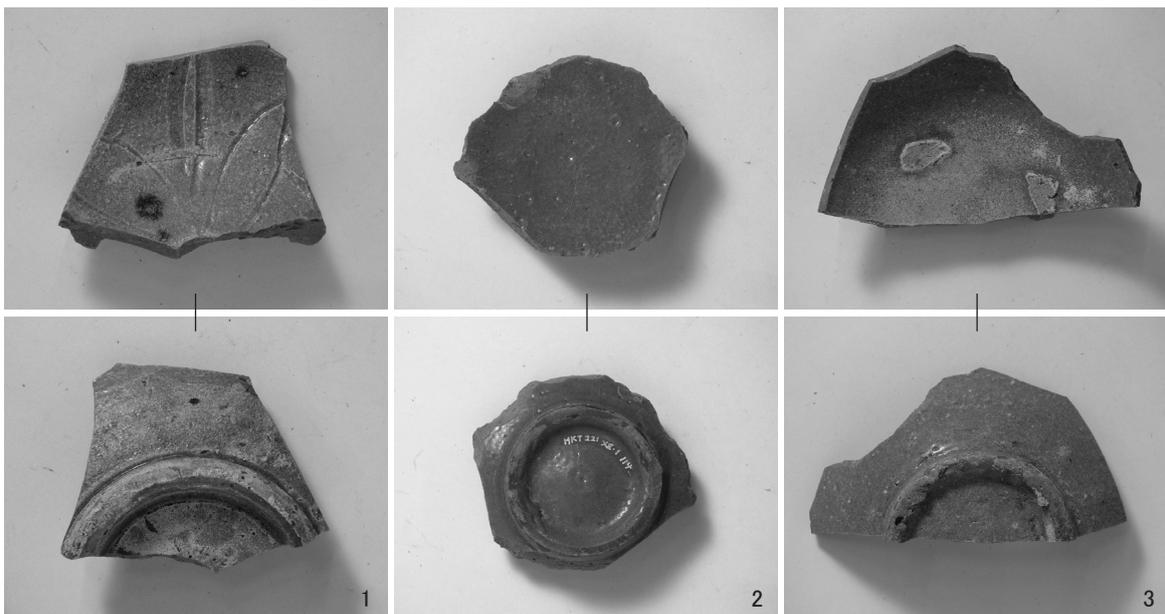


Fig.192 Ⅷ区357号遺構出土遺物実測図2(1/3、1/4)

⑮ その他の出土遺物

以下、主要遺構の報告中で触れることができなかつた遺物の中から、看過できないもの、特殊なものを選んで紹介する(Ph. 277～278)。

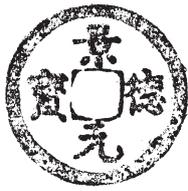
1～3は、高麗青磁の碗である。1は、見込みに片切彫りの沈線で花文を描いている。全面施釉する。胎土は粗く、釉も滑らかさを欠く。ただし、二次的に被熱しているようで、そのために釉があらわれている可能性はある。2は胎土、釉ともに良好な精品である。全面施釉で、見込みには目跡は認められない。3は、胎土に石粒を多く含んで粗く、釉も灰緑色の濁った色調を呈する祖製の青磁である。見込みにも畳付きにも目跡が残っている。見込みの釉の表面が細かく泡立っており、二次的に被熱したものであると思われる。4は、白磁碗である。型作りの碗で、薄いベージュ色の胎土に白色の釉をかける。外面の釉は、畳付きにかかって止まる。高台の中央には丸く赤変した部分が見られ、重ね焼きの窯道具が当たった痕跡であろう。おそらく徳化窯の製品と考える。5は、土師器の面である。内側から穿孔して、左右の目をあらわす。内側にはもう数か所、穿孔しかけた窪みがあるが、貫通していない。外底部には、ちょうど口のような趣で胎土の割れが、起きている。おそらく、これを口に見立てることで、無用な穿孔を避けたのであろう。6は、赤間石の硯片であり、転用のため加工しかけている破片である。



Ph.277 Ⅷ区その他の出土遺物1



Ph.278 Ⅷ区その他の出土遺物2



Tab. 5-2
景德元寶



Tab.6-2

Tab.6 HKT221 出土錢貨一覧表

XII区				
番号	出土遺構	錢貨名	字体	備考
1	001	□ _欠 祐□ _欠 寶	真書	
2	235	景德元寶	真書	

Fig.193 XII区出土錢貨 拓本(1/1) Ph.279 XII区出土錢貨

長方硯の硯首の右角を、四角く切り取った破片で、破面にはやすりをかけて平坦に整えている。また、墨池横の側壁を折り取っており、あたかも椅子のような形に整えようとしていたことがうかがわれる。7は、滑石の石錘である。両端を縛った袋のような形に作る。両端の括れた部分を紐かけとみて石錘としたが、全体でも4cm程度の小型品であり、紐かけではない可能性もある。その場合は石錘という推測自体が、間違っていることになる。8・9は、常滑窯の製品である。8は壺、9は甕である。8は、縮まった頸部から大きく外反して口縁となる。口縁部は、上方に折り返すが、丸みを持っていて面をなさない。肩部には沈線が廻っており、三筋壺の可能性も考えられる。9は、外反気味に立ち上がった頸部から、外方にほぼ水平に引き出して口縁とする。口縁端部の上面には、口縁を軽く屈折させたことによる沈線状のくぼみが巡る。ともに12世紀後半代に位置付けることができる常滑窯初期の製品である。

そのほか、出土した銅銭については、Tab. 6及びFig. 193に示す。銅銭の出土量は少なく2点の出土にとどまった。図示したのは、235号遺構（溝）から出土した北宋銭の「景德元寶」である。

3. 小結

XII区の調査においては、3面の遺構面を設定し調査を行った。第1面は、13世紀以降、第2面は古代～中世前半、第3面は第2面と同様で、第2面で検出しきれなかった遺構を調査したものである。

XII区においては、10世紀の溝状遺構（210号遺構）が示すように古代から遺構が営まれているが、12世紀前後から急激に遺構が増加したことが明らかとなった。すなわち、12世紀初頭の井戸である357号遺構を皮切りに、348号遺構（井戸）、332号遺構、349号遺構（土坑）が営まれ、12世紀後半には342号遺構（井戸）、157号遺構（土坑）と続いていく。古代の遺構は決して多くなく、357号遺構以前の井戸が見当たらないことから見ても、古代の土地利用は活発とは言えない。古代に関して言えば、近接したVI区においては9世紀以降の井戸が調査されており、決してこの地域全体が遺構密度が低いとは言えないものの、12世紀代の遺構の急増は、顕著である。12世紀前半は港湾関連遺構である石積遺構が機能していた時期であり、無関係であるとは考えにくい。石積遺構のすぐ背面に当たるIII区においては、12世紀前半には遺構は営まれずに空き地（＝荷揚げ場）であった。XII区において遺構がまだ目立たない11世紀後半段階では、III区から続く荷揚げ場、井戸・廃棄土坑が急増する12世紀前半にいたって、港湾管理にかかわる施設空間にかわっていったのではなかろうか。

場の性格、変化の問題は、XII区だけの調査成果で論じられるものではなく、次年度報告でIV区、IX区、XI区の調査成果がまとまって各区の成果が出そろいのを待って、総合的に検討したい。

第九章 補遺 V区002号遺構出土の博多人形関連遺物

V区第1面002号遺構から、大量の博多人形関連遺物が出土した。前章の説明から漏れたので、補遺として一章を設け、報告するものである。

V区00号遺構は、調査区の中ほどやや南寄りから検出した土坑である。直径1.2mほどの円形を呈し、深さは約90cmの円筒形の土坑である。焼け土や木炭粒が多く混じった土を埋土としていた。出土遺物は、近世の国産陶磁器と、博多人形の破片や土型などである。

Ph. 280(1)に示したのは、土製の面と大型の人形である。土製の面には、目・鼻の孔・口がそれぞれ透かしになっており、両側面の耳の上あたりに紐かけの孔が穿たれている。Ph.280(2)には、人形の頭や縁起物を集めた。七福神や童子、だるま、獅子頭などがある。(4)は、小型の人形で、自立するように作られている。(3)は、池灯籠のパーツである。池灯籠は、箱庭のことで、いわばジオラマである。お城、寺院の塔、民家などがある。(6)は鳥形の笛である。上下を型作りして張り合わせた中に、土製の玉が入っていて、息を吹き込むと鳴る。いわばホイッスルである。(5)は、稻荷の狐とその土型である。



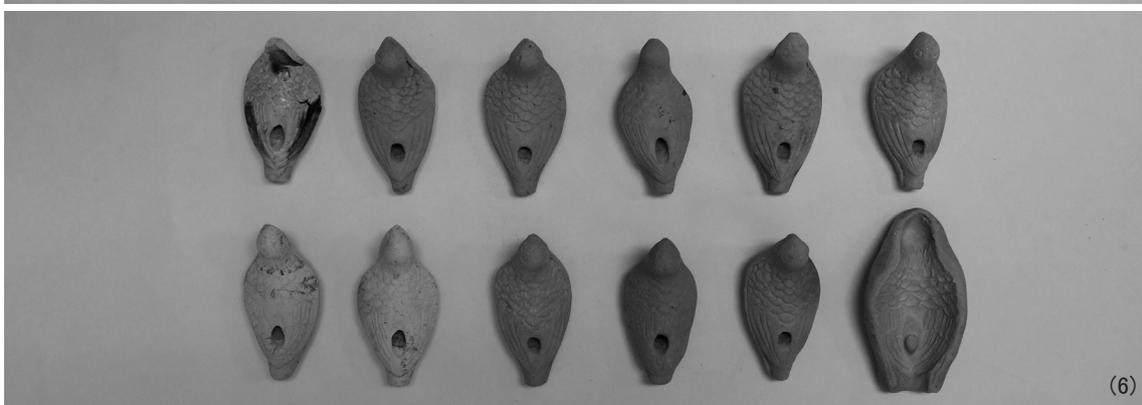
Ph.280 V区002号遺構出土博多人形関連遺物1



(4)



(5)



(6)

Ph.281 V区002号遺構出土博多人形関連遺物2

第十章 博多遺跡群第221次調査出土試料、および関連試料の年代測定

山形大学高感度加速器質量分析センター

1. はじめに

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課よりご依頼頂いた試料3点（写真1）について加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。その内訳は表2に示す。

2. 試料と測定方法

表1に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析装置（NEC製1.5SDH）を用いて放射性炭素濃度を測定した。

3. 結果

表2に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った放射性炭素年代、較正曲線データを使用して放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。各試料の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

年代測定の考え方

放射性炭素（ ^{14}C ）年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4.4¹⁾（較正曲線データ：IntCal20²⁾）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

- 1) C Bronk Ramsey, BAYESIAN ANALYSIS OF RADIOCARBON DATES, Radiocarbon, 51 (1), 337-360 (2009).
- 2) Paula J Reimer, William E N Austin, Edouard Bard, Alex Bayliss, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Martin Butzin, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Irka Hajdas, Timothy J Heaton, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Sturt W Manning, Raimund Muscheler, Jonathan G Palmer, Charlotte Pearson, Johannes van der Plicht, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Christian S M Turney, Lukas Wacker, Florian Adolphi, Ulf Büntgen, Manuela Capano, Simon M Fahrni, Alexandra Fogtmann-Schulz, Ronny Friedrich, Peter Köhler, Sabrina Kudsk, Fusa Miyake, Jesper Olsen, Frederick Reinig, Minoru Sakamoto, Adam Sookdeo, Sahra Talamo, THE INTCAL20 NORTHERN HEMISPHERE RADIOCARBON AGE CALIBRATION CURVE (0–55 CAL kBP), Radiocarbon, 62, 1-33 (2020).

表1 試料情報

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-16730	FKOK-No3	福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課試料 2022/09/16受取 試料3 木片試料 出土遺構: 7区1面003号遺構 遺物内容: 木棺床材 現状: 木片 FKOK-No3	前処理後の試料 21.578mgから3.020mg使用	超音波洗浄実施(純水、アセトン) AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間(2回) 1M HCl 80度1時間
YU-16742	FKOK-No15	福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課試料 2022/09/16受取 試料15 炭化物試料 出土遺構: 7区1面017号遺構 遺物内容: 木 現状: 炭化木材 FKOK-No15	前処理後の試料 234.056mgから2.312mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間(3回) 1M HCl 80度1時間
YU-16743	FKOK-No16	福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課試料 2022/09/16受取 試料16 炭化物試料 出土遺構: 7区1面019号遺構 遺物内容: 炭 現状: 木炭 FKOK-No16	前処理後の試料 128.611mgから2.309mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間(3回) 1M HCl 80度1時間

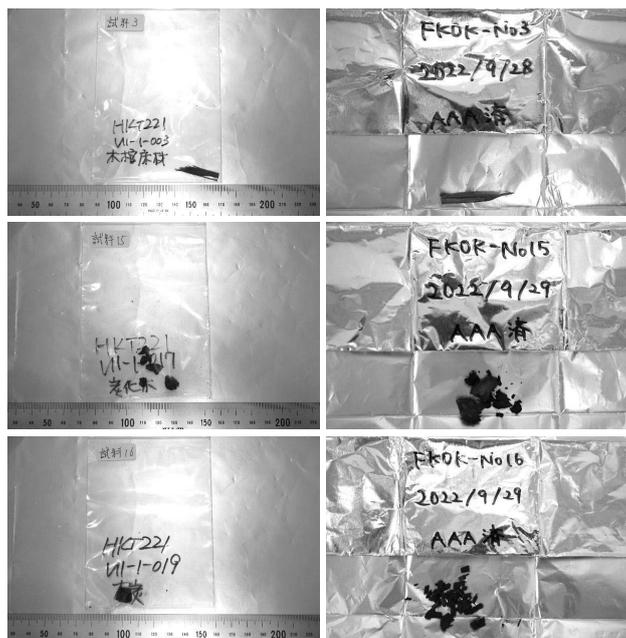


写真1 分析試料

表2 測定結果

測定番号	試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	放射性炭素年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
YU-16730	FKOK-No3	-25.04 \pm 0.39	1199 \pm 21	782AD (8.1%) 791AD 821AD (60.1%) 881AD	774AD (95.4%) 885AD
YU-16742	FKOK-No15	-24.54 \pm 0.28	1079 \pm 21	900AD (22.4%) 918AD 973AD (37.5%) 996AD 1007AD (8.4%) 1015AD	894AD (28.0%) 927AD 947AD (67.4%) 1022AD
YU-16743	FKOK-No16	-26.05 \pm 0.27	1033 \pm 21	995AD (68.3%) 1023AD	991AD (95.4%) 1033AD

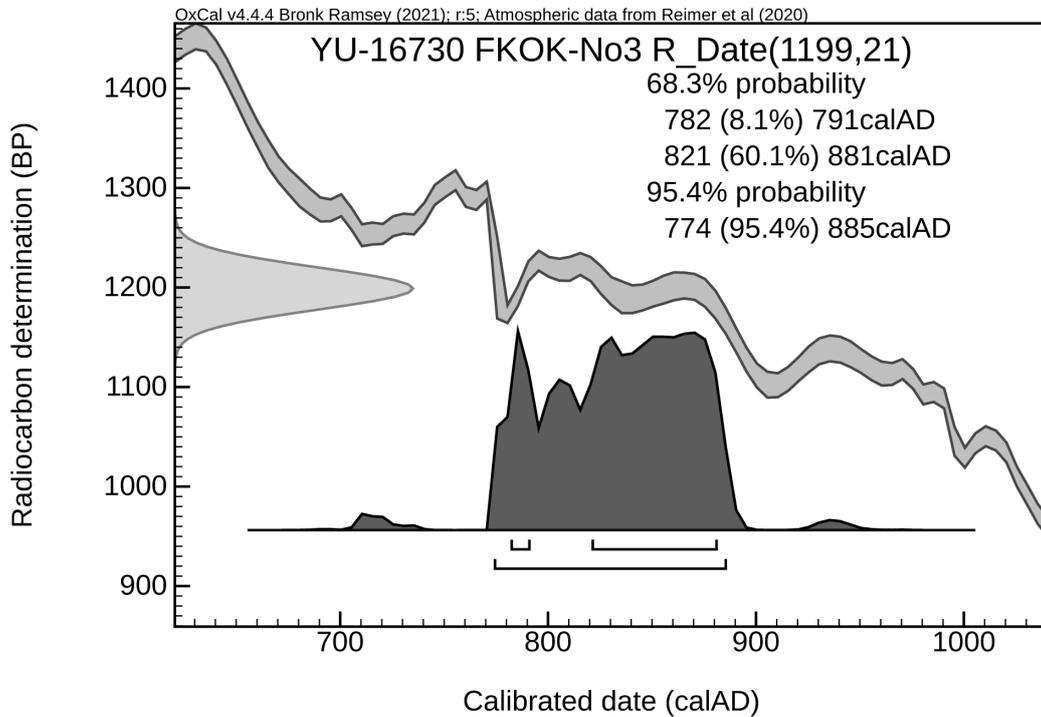


図1 VII区003号区遺構計測結果

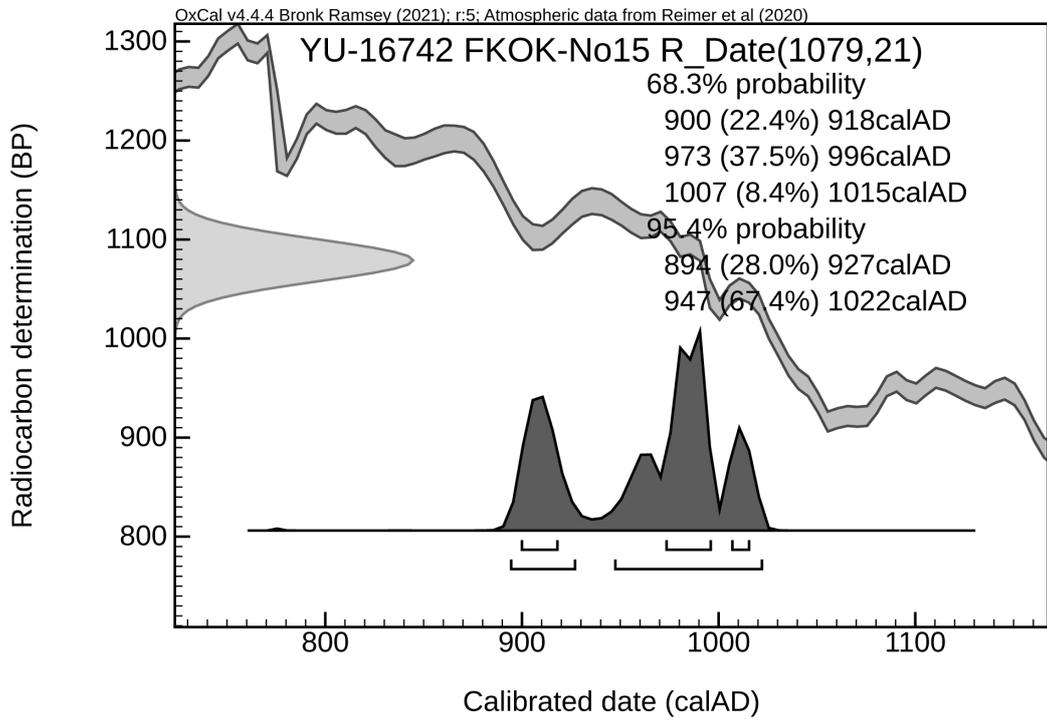


图2 VI区017号遺構測定結果

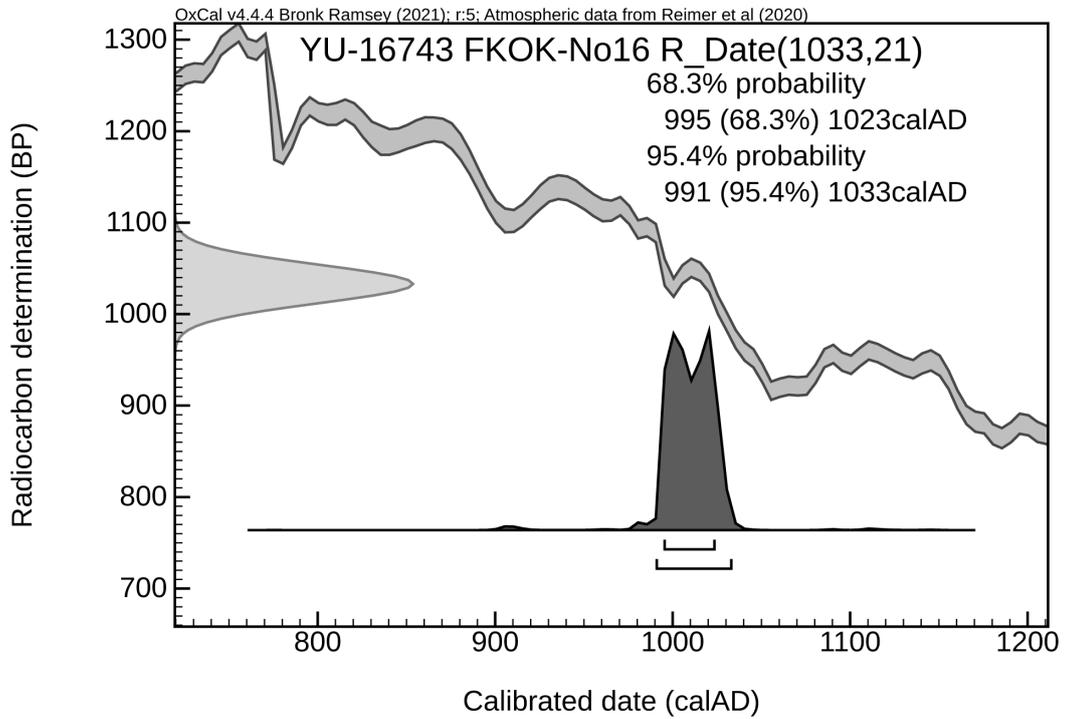


图3 VI区017号遺構測定結果

第十一章 おわりに

1. はじめに

本書を閉じるにあたって、本書で報告した博多遺跡群第221次調査Ⅲ区・Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区・Ⅹ区・Ⅺ区の若干の論点を提示し、まとめに替えることとする。

第221次調査の報告は、令和4年度でⅠ区・Ⅱ区と、中世初頭の貿易港湾博多の港を縁取った石積遺構について刊行した（『博多190』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1467集、『博多191』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1468集）。その後、整理・報告を進めるにあたって、石積遺構を境にその陸地側と海側とに分けて、作業することとした。令和5年度に、陸側の各区を対象として、報告するのが、本書である。

したがって、第221次調査の成果全体を総括するのは、石積遺構から海側（厳密には河口側）を報告する次年度以降に譲るものとする。

2. 砂丘地形の復元

調査対象地の南東—北西方向については、Ⅲ区、Ⅵ区、Ⅴ区がおおむねその調査区東壁を連ねる形となり、旧地形に対する一連の地層観察を可能とした。北東—南西方向についてはⅩ区、Ⅴ区、Ⅳ区

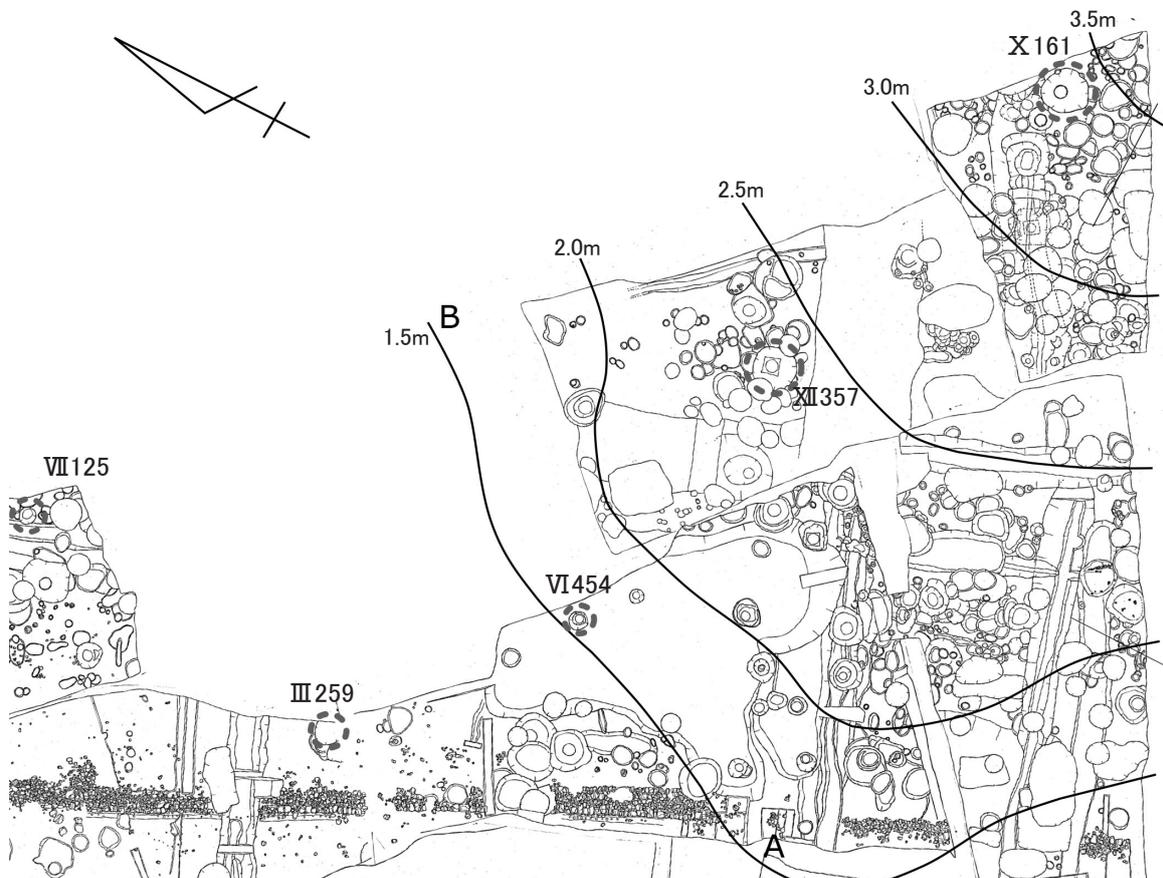


Fig.194 221次調査地点砂丘地形復元想定図(1/400)

が一連の調査区壁面となる (P. 6、Fig. 5)。

旧地形復元は、昨年度刊行の『博多191』においても試みている。結果的には重複するが、ひとまず記すことにする。

Fig.194に発掘調査で得られた砂丘砂層の標高から復元した砂丘等高線を図示する。

砂丘は、南のX区において最も高く、標高3.4mを測る。対象地外では、XII区と土居通の街路を挟んだ向かいの第70次調査地点において、3.8mを、その北側の第139次調査地点では南側で3.2m、北側で2.4mと、次第に北に向かって下降していく状況が確認できる (Fig.4参照)。砂丘頂部は、X区の南側から北東方向に高まって続いていくラインを尾根筋として、北西には斜面をなしていたことが推測できる。それは、XII区の北角から4m付近で傾斜を強めていく。VII区とXII区の間には、防火水槽による大規模な攪乱と旧冷泉小学校敷地出入口 (発掘調査時にも出入口として常時使用) による未調査部分があり、砂丘が落ちていく先については確認できていない。

調査区南東辺における砂丘標高を見ると砂丘は、東から西に下降する。ここには、粗砂がすりついており、それはやがて暗灰色を呈して標高1.6m付近から河川堆積層に移行する。すなわち、表層的には砂丘はここままで、ここからは河川堆積層に変わっていくことを示している。

ところで、VII区は、河川堆積砂層を基盤とするが、標高1.4~1.5mほどでほぼ水平な面をなしている。また、III区の石積遺構背面の整地層上面は、石積遺構の際では1.3m前後だが、おおむね標高1.6mで平坦面を成している。整地層の下は、標高1.3~1.4m以下で河川堆積砂層となる。これらの標高値を総合すれば、標高1.5mを切るあたりから下っていく砂丘砂の上面に河川堆積砂層が被り始め、それは砂丘砂層の下降に伴って厚さを増していくことがわかる。

さらに、河川堆積砂層の上面に土を入れて標高1.6m程度の平坦面を整地することで、石積背面の広場を造成したと思われる。

3. 石積遺構背面の景観

石積遺構背面には、標高1.6m程度の平坦面が造成されていたことを前節で検討した。VII区においては、第1面が標高1.5~1.7mでこれに対応する。

この状況をFig.194に即してさらに見ると、石積遺構がいったん途切れるA地点から推定B地点を結ぶ線から北西側においては、ほぼ平坦な整地面が広がっており、A-Bラインの南西側で砂丘が急に盛り上がっていたことがわかる。

次に石積遺構が機能した11世紀後半から12世紀前半の遺構分布を見よう。11世紀後半の顕著な遺構は確認できていない。12世紀前半では、VII区で大型廃棄土坑 (VII-017、-110、-125)、III区で大型廃棄土坑 (III-259)、VI区で井戸 (VI-454)、X区で井戸・土師器一括廃棄遺構 (X-161下層遺構・上層遺構)、XII区で井戸 (XII-357・348)・土坑 (XII-332・349) が検出されている。A-Bラインを境に北西側には遺構はほとんどない上に井戸はなく、南東側には大型廃棄土坑はない。特にX区161号遺構は、井戸が廃された時点で土師器皿・坏の一括廃棄が行われているが、この一括遺物中には十数個体に及ぶ楠葉型瓦器碗が含まれていた。楠葉型瓦器は、言うまでもなく生産地が河内にある畿内系の瓦器碗で、同じ畿内系の和泉型瓦器と異なって商品的な流通はしないとされる。すなわち、畿内との人的あるいは直接的な関係の下にもたらされたもので、公的な拠点や流通拠点に点的に分布する。博多遺跡からの出土は決して特殊ではないが、一遺構からまとまった点数の楠葉型瓦器碗が出土したのは、おそらく初めてである。その背景に畿内からの人の移動を想定すると、それはおそらく唐物の優先

な入手を目的とした貴族層にかかわりを持つ人物であり、土師器一括廃棄にカワラケを大量使用する共食儀礼を想定すれば、大宰府の官人層との関わりも見え隠れする。

これらの遺構分布には、石積背後の空間利用の違いがあるのではないだろうか。柱穴などが全く見当たらない平坦地に荷揚げ広場を、井戸が分布し平坦地を見渡す砂丘上に大宰府官人らが常駐する、あるいは臨時に詰める港湾機能を管理するための施設を想定したい。

4. 蘇民将来符について

VII区017号遺構から、「蘇民将来子孫」と書かれた木簡が出土した。長さ9.0cm、幅1.6cmの小さな木簡だが、圭頭で両側から切れ込みを入れた整った形をとる。

まず、墨書文字に関する観察を記す。「蘇民将来…」と書かれた面を表面とする。

表面では、圭頭部分の上下左右に墨痕が認められる。四仏の種子を書いた可能性を念頭に赤外線写真を検討したが、判読できなかった。主文は、「蘇民将来子孫」と大きく書かれている。木簡の下端は折損し、点の打ち込みが残るので、「之」字が続くものとすれば、定型句として「蘇民将来子孫之宅」あるいは「蘇民将来子孫之門」と書かれていたことが予想される。

裏面の墨書は、きわめて細く小さい文字が並んでいる。圭頭の下部から切り込みの下にかけて、いくつもの丸印とそこから垂下するような四条ほどの墨痕が見られる。丸印の下に文字が並んでいるのか、全体が天蓋のような文様なのか、判然としない。表面圭頭部分に対応して四仏の真言が書かれている可能性も想定したが、判断できなかった。主文の墨書は、二行に書き分けられている。右行は、切り込みのやや下から始まって、まず一文字の墨痕らしいものが見られ、「請カ」と続く。以下、下



Ph.285 「蘇民将来」木簡赤外線写真

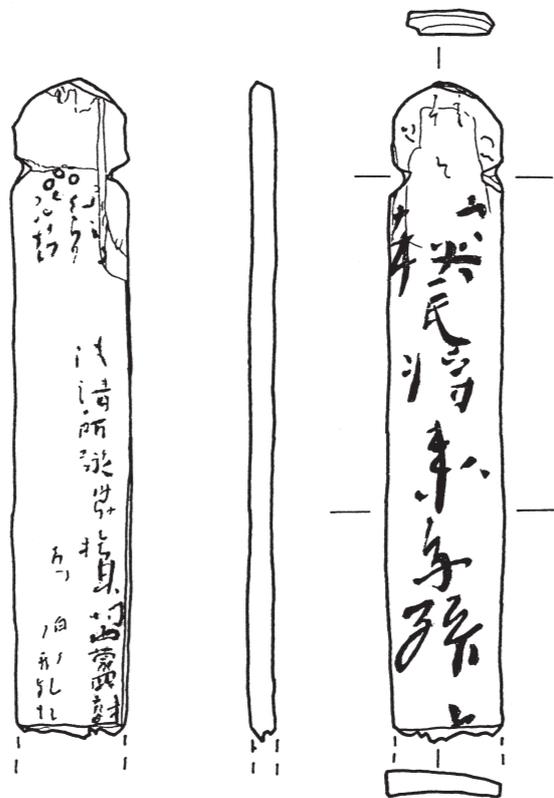


Fig.195 「蘇民将来」木簡実測図(1/1)

端の折損部まで、墨痕が良く見える部分もあるが判読にいたらず、10文字程度が書かれているものと推測するにとどまる。左行も墨痕は認めるが、判読にいたらず、墨痕かどうか不確定な部分もある。右行の下半分くらいに書かれている。(判読にあたっては坂上康俊(九州大学名誉教授)、細井浩志(長崎活水女子大学教授)、柴田博子(宮崎産業経営大学教授)、大高広和(大正大学講師)のご指導をいただいた)。

さて、表面の「蘇民将来子孫」云々であるが、蘇民将来の伝承に基づく厄除けの護符である。物語は、備後国風土記逸文に登場し、京都の祇園社に伝わる「祇園牛頭天王縁起」、長野県上田市信濃国分寺所有の「牛頭天王之祭文」(文明12年=1480の写し)など古代・中世を通じて広く流布した説話である。

簡単に紹介すると、妻問いに出向く旅の途中の武塔神が一夜の宿を求めたところ、富裕な弟の巨丹将来は断り追い返したのに対し、貧乏な兄の蘇民将来は持てるものを尽くして宿を提供してもてなした。年が過ぎて、武塔神は報復に現れる。巨丹将来の家を滅ぼすことを告げる武塔神に蘇民将来は娘が巨丹将来の家で召し使われているので助けてほしいことを願い、武塔神は茅の輪を腰につけることを指示する。武塔神は巨丹将来の家人を皆殺しにして滅ぼしたが、娘は難を逃れる。武塔神は自分はスサノヲの神であると告げ、今後疫気があれば、蘇民将来の子孫とって茅の輪を付けた人はたすかることを約する、というものである。

考古資料としては、長岡京跡で「蘇民将来子孫者」と記した木簡が出土しており、蘇民将来符をもって災厄を逃れるという信仰が8世紀にさかのぼることを示している。

ところで、この説話の中で猛威を振るう武塔神は、スサノヲの神であり、牛頭天王と同一視されるようになる。京都三大祭りの一つである祇園祭の淵源は牛頭天王を慰撫して災厄を逃れる祭りであり、災厄を京の市中に入れたいための祭礼である。これは、博多の櫛田神社で執り行われる祇園山笠でも同様である。櫛田神社は、都市博多の西の縁辺に鎮座する。江戸時代にはすでに行われなくなっていたようだが、そもそもは櫛田神社から北の浜辺に近い沖浜えびす社に神輿が動座し、それに続いて山笠が奉納される。すなわち、都市の境界をうかがう祇園の神(スサノヲの神)に対し、浮立でこれをもてなすことで他所に行ってもらって災厄を市中に入れたいための祭りである。

博多221次調査地点は、蘇民将来符が出土したⅦ区017号遺構の当時、石積遺構が港湾として機能していた時代であり、都市博多の縁辺=境界であり、日本国の水際でもあった。古代から中世、「疫病は外つ国から」と信じられていた。平家全盛の時期に博多から全国に蔓延したとされる「銭の病」も外国から入ったとされる。このような信仰の中で、水際である博多の港湾において、境界の祭祀が行われたであろうことは想像に難くない。石積遺構からは、牛の頭蓋骨を倒置した遺構が出土した(『博多津博多191』福岡市埋蔵文化財調査報告第1468集)。石積遺構の出入り口部分のすぐ間際である。その出土位置が、博多の港湾遺構であり、日宋貿易の港であったことを考えると、防厄的な性格が感じられる。

さらに牛の頭蓋骨から牛頭天王を想起することが許されるならば、蘇民将来木簡と無関係ではなかろう。くわえて、祇園社の祭礼を持つ櫛田神社が221次調査地点の南に隣接することを考え合わせると、石積遺構で行われた牛の頭蓋骨を用いた祀りや蘇民将来の信仰が、櫛田祇園山笠の淵源として位置付けられるといっても過言ではないかもしれない。



Ph.286 Ⅲ区石積遺構牛頭蓋骨出土状況(北西より)

5. 鏃型木製品について

VII区017号遺構からは、鏃の形態を模した木製品が出土した。

全長10.5cm、刃部長4.4cm、茎長5.0cm、矢の根の部分は刃部が内湾気味に長く伸びた二等辺三角形を取る。鏃身は、中央に鑄が入るタイプではなく、扁平な身の縁辺部を表裏両面から削り込んで、鋭い刃を付ける。本品は木製であるが、作りは極めて写実的であり、鉄の鏃を作るにあたっての見本であり、発注見本=「試し」として作られたと考えられる。

ところで、長く鋭く内湾する鏃身の形状は、かなり違和感があるもので、尖り根式、平根式などと呼ばれる日本の鏃の形状には、一致するものは見られない。そこで、試みに中国の鏃を調べたところ、ほぼ一致する例を見出した。Ph.287は、北宋代の慶暦4年（1044）に刊行された軍事書である『武経総要』に掲載された矢の図である（『武経総要』前集卷之十三）。

前のページには弓の図が並び、次のページには弩の図、さらに弩の矢の図と続くので、弓の矢を図示したことは疑いない。017号遺構は12世紀前半と考えられるので、『武経総要』の刊行年とは100年と離れておらず、ほぼ同時代といえるだろう。

ここに描かれた中の「鉄骨麗鏃箭」が、該当すると思う。

本書では、その特徴的な形状から、鏃型木製品は「鉄骨麗鏃箭」の鏃を製作するにあたって、その見本として作られた「試し」であったと位置付けたい。

ただし、その場合、誰がなぜ「鉄骨麗鏃箭」を博多で作らせようとしたか、が問題となる。日本の弓は、長弓である。短弓の短い矢は、長弓には適さない。もちろん、作るのは鏃部分だから、長い矢

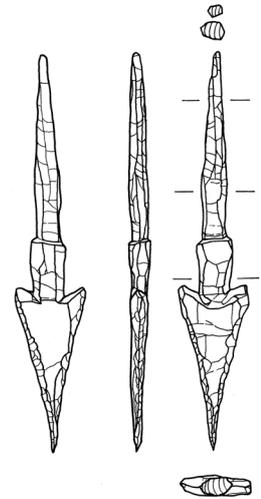
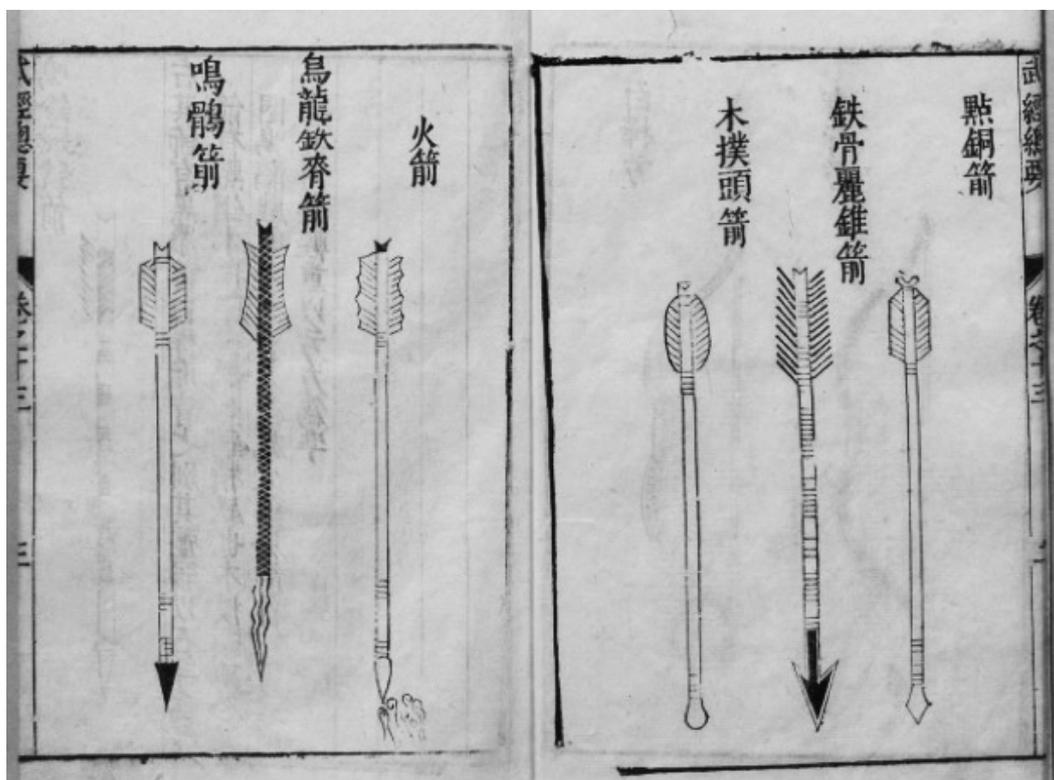


Fig.196 鏃型木製品実測図(1/2)



Ph.287 『武経総要』前集卷之十三より矢の図(市立米沢図書館所蔵「米沢善本」より、市立米沢図書館提供)

柄に装着すれば、長弓で射ることは可能である。その場合、発注者は日本人であろう。一方、短弓で用いる矢として作らせたとしたら、発注者は宋人であったことになる。使い慣れた短弓を、故郷を離れた日本で使うつもりだったのか、あるいは貿易船に持ち込む矢が不足したために急ぎ作らせたものであろうか。同時期、日本から中国への硫黄輸出が始まっていて、日宋貿易の主要輸出品になっていた。これは、北方の遼や金との交戦に用いる兵器の、火薬原料としての硫黄の需要が増したためである。同様に弓矢に対する需要も増大していたと考えれば、一時的に大量の矢を必要とする状況の下で、日本に鏃の生産を発注する状況が生じたかもしれない。しかし、中国の史料に、それを窺わせるものはない。いずれ憶測の域を出るものではないが、可能性として最も高いのは、博多に住む宋人が、貿易船警護のために船に積み込む矢が不足して、発注したというところであろう。

今後の調査で、この「試し」をもとに製作された鉄製の鏃が出土することに期待したい。

6. 花十字文刻印瓦について

Ⅲ区114号遺構から、花十字文刻印瓦が発見された。小さな刻印を打った平瓦片だが、博多では初めての出土になるので、触れておきたい。

Ⅲ区114号遺構は、Ⅲ区第2面で検出した大規模な掘り込みで、遺構の性格は不明である。近世初頭に、おそらく町場再整備の一環として大量の砂を一気に落とし込んで埋められている。床面付近にはまとまった量の瓦が廃棄されていたが、その中に花十字文刻印瓦が含まれていた。

花十字文刻印瓦については、乗安和二三氏による検討がある（乗安和2011「花十字文刻印瓦をめぐって」『山口考古』第31号、山口考古学会）。詳細は同論文を参照願いたい。乗安氏は、花十字文刻印瓦が出土している長崎市勝山町遺跡2区土坑5や山口県岩国城跡、同萩城跡の史料を検討して、博多をその生産地として想定した。さらに、「当時、博多は堺や大阪とともに西日本における瓦の一大生産地であり、博多からは筑前管内以外にも対馬・肥前・周防・長門等各地へと広域的に瓦が供給されていた」と、「博多の瓦屋において花十字文軒丸瓦が生産され（花十字文刻印はその瓦屋の刻印と乗安氏は位置づける、筆者注）、それが長崎などを中心に供給され」としつつも、「今当該地（博多、筆者注）での出土例が確認されていない現状においては、一つの推論に過ぎない」とした。

今回のⅢ区114号遺構出土花十字文刻印瓦は、乗安氏の論考を推論の域にとどめていた、当時まだ得られていなかった博多での出土例に当たるものであり、ごく小さい刻印であることを見ればこれまで見落とされていた可能性もある。今後さらに注視していく必要があることを指摘しておきたい。

7. 国史跡指定について

本年（令和6年）2月21日付官報号外において、博多遺跡群第221次調査で出土した中世初頭の石積遺構の国史跡指定が告示された。

石積遺構は、平成30年、すなわち旧冷泉小学校跡地を対象とした発掘調査が始まった年に、Ⅱ区の調査でその一部が出土した。発掘調査に当たった福岡市埋蔵文化財課では、周辺調査の状況から中世港湾遺構の可能性が想定されたことから、遺構の破壊につながる、石積を除去しての発掘調査は行わないこととして、以後の発掘調査成果を待ってその是非を判断することにした。翌平成31年度のⅢ区調査では、石積遺構が直線的に南に伸びることを確認、くわえて石垣状の立面を呈することから、国内に類例のない石積護岸であることが想定された。そして、令和2年度のⅤ区・Ⅵ区調査にお

いて、石積遺構は第221次調査地点を南東から北西に貫くその全貌を現したのである。

石積遺構は出土遺物の年代観、放射性炭素AMS法による年代測定から、11世紀後半に築かれ、12世紀半ば過ぎには洪水によって埋没したことが明らかになった。

また、石積遺構前面の包含層から、硫黄片69点が出土した。硫黄は日宋貿易の主要輸出品とされ

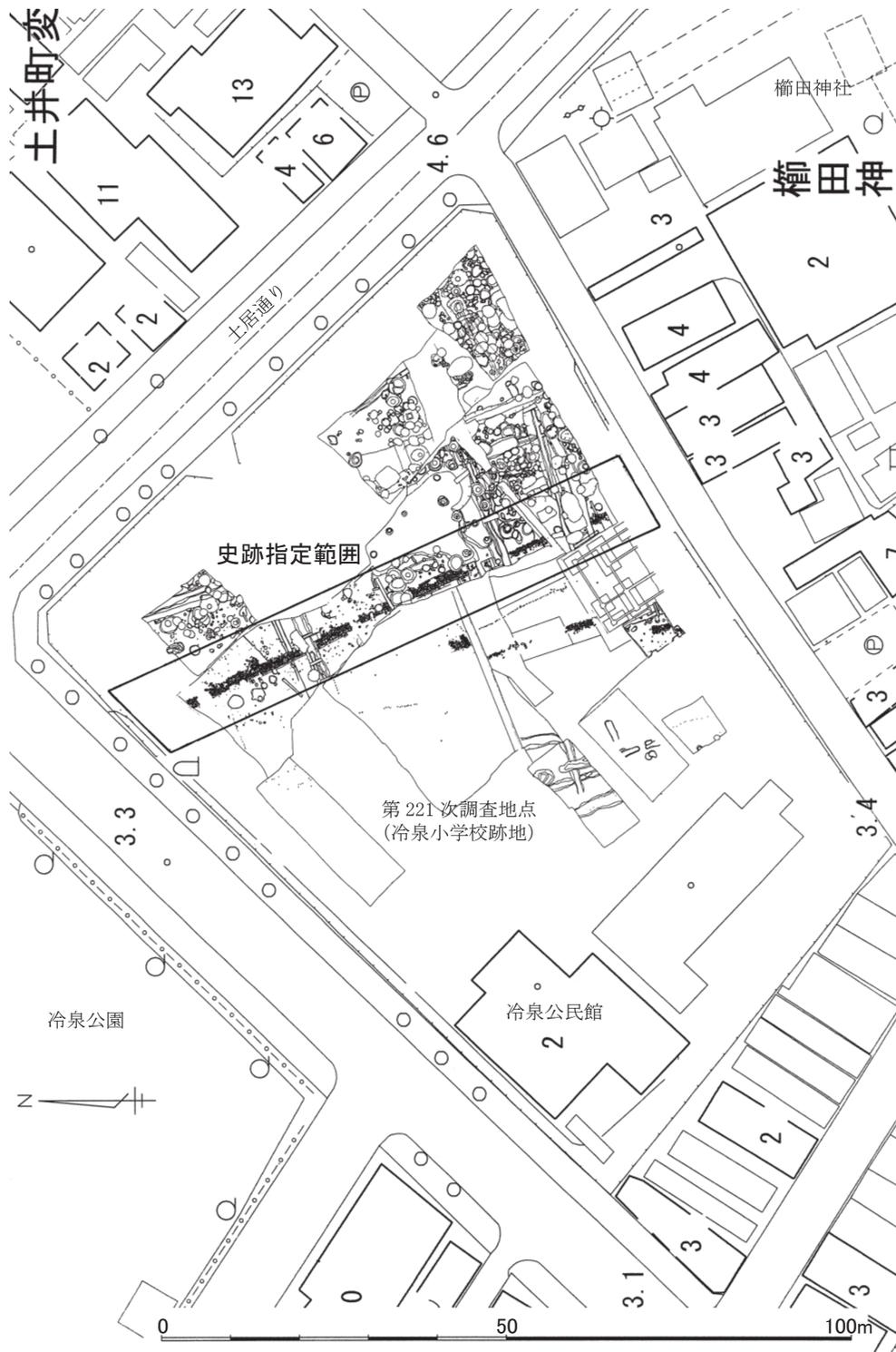


Fig.197 国史跡「博多遺跡」指定地位置図(1/1000)

ながら土中では短期間に分解してしまうことから実際の出土例は得られていなかった。すなわち、221次調査出土硫黄は、日本初の出土事例であるとともに世界史的な発見でもあった。硫黄は、同位体比を調べることによって産地同定が可能となる。36点を対象に行った分析によって得られた硫黄同位体比は、薩摩硫黄島であり、豊後の九重硫黄山と塚原鍋山産の硫黄が混じる可能性が指摘された（『博多191』86～90頁）。薩摩硫黄島については、平家物語の俊寛にまつわる説話でその採集から薩摩商人との交易が語られており、平家物語の世界に実景を添える発見ともいえよう。

博多は、11世紀中頃に鴻臚館から貿易拠点が移ってきたことで中世港湾都市として発展を遂げる。出土した石積遺構は、まさにこの時期に当たり、中世港貿易港湾都市博多、ひいては福岡市発展の原点となった遺構であるといえる。

このような石積遺構の意義を重く見た福岡市では、そもそも旧冷泉小学校跡地の再開発が前提となって実施された発掘調査であったこともあって、その取扱いが課題となった。平成21年7月7日には光山裕朗副市長が、14日には高島宗一郎市長が視察に訪れた。

こうして調査中の早い段階で、石積遺構保存の方針が決まり、遺構は埋め戻しての保存が図られるとともに、国史跡指定を視野に入れることになった。石積み遺構の埋め戻しに当たっては、石の間を含めて遺構全体を砂で詰めた土嚢で完全に多い、さらにその上に厚さ30cmの砂による保護盛り土を行った上で、残土による埋め戻しを行った。旧冷泉小学校跡地の発掘調査は、令和4年2月に終了した。

1年8か月後の令和5年10月20日、文化庁の文化審議会から国史跡指定の答申を得た。そして、本年（令和6年）2月21日の官報告示となった。

史跡名称は「博多遺跡」である。文化庁が公表している答申の詳細には次のようにある。

博多遺跡 はかたいせき【福岡県 福岡市 ふくおかし】

福岡県福岡市博多区に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である博多遺跡群のひとつで、中世の港湾に係る遺跡を指す。福岡市教育委員会が実施した発掘調査で、拳大から人頭大の石を幅1.2～1.6m、高さ約60cmの列状に積み上げた護岸と考えられる石積遺構が約70mにわたって検出された。時期は11世紀後半から12世紀前半に機能し、12世紀中頃から後半の洪水堆積物で埋没している。当時の水際から6mほど陸側の砂丘末端から河川堆積層にかけて直線的に構築されており、海側の石材は面を強く意識している。その位置や構造から港湾施設と考えられる。また、これと同様の港湾施設が中国の寧波や温州で発掘されていることから、宋商人らが関与して構築されたと想定される。

石積遺構の周辺には石積遺構と同一の方向をとる同時期の遺構群が展開し、また汀線際に投げ捨てられた白磁一括廃棄遺構等が検出されていることなどから、宋商人の居住区である「筑前博多津唐房」に関連する区画が付近に存在した可能性が示されている。出土遺物には、多量の貿易陶磁器片のほか、日宋貿易の主要な輸出品のひとつであった大分県九重硫黄山産や鹿児島県硫黄島産の硫黄が出土していることが注目される。鴻臚館に代わる新たな施設として11世紀後半に造られた港湾施設で、中世のアジア規模での交易の内容やその担い手を示す重要な遺跡である。

都心部のただ中での史跡指定、埋蔵文化財保存であり、関係各位のご理解とご尽力に感謝申し上げる次第である。

博多遺跡群第221次調査に伴う出土人骨の分析について

高橋寛宇¹・米元史織²・舟橋京子³

1: 九州大学大学院地球社会統合科学府

2: 九州大学総合研究博物館・アジア埋蔵文化財研究センター

3: 九州大学大学院比較社会文化研究院・アジア埋蔵文化財研究センター

1. はじめに

先史以来の長い歴史を持つ博多の町の市街地に位置する博多遺跡群からは、これまでも様々な時代の人骨資料が出土してきた。特に、中橋孝博氏による福岡市天福寺から出土した近世人骨の分析から他地域との類似点及び相違点が明らかにされている(中橋 1987)。一方、それ以前の当該地域における人骨資料については依然として、蓄積の途上であるといえよう。

当該地域周辺は、渡来系弥生人に関する自然人類学・考古学的な研究の蓄積は膨大であるが、弥生時代以降の時代変遷による形質の移り変わりの様相を考察することは考古学および自然人類学の長年の課題であった。古代から中世にかけて人骨資料を分析することで、その課題の解決の一助になる可能性が示唆される。さらに、近年では特に文献史学と考古学の両分野によって古代から中世にかけての「貿易都市・博多」の様相が明らかにされつつある。言うまでもなく、当遺跡から出土する人骨資料は博多における交易に関わった人々である可能性すら含み、中世における貿易都市博多の研究をさらに深化させるためにもこれまでの研究の蓄積と古人骨研究の融合にも期待される。

博多遺跡群第221次発掘調査は、福岡県福岡市博多区上川端にて、2018年-2022年に実施された。中世密教寺院である大乘寺の寺域は調査区に含まれる。寺伝によれば、大乘寺は大同元年(806年)に弘法大師空海による開基とされ、建治3年(1277年)に叡尊流西大寺律宗の開祖である叡尊が再興し、龜山上皇の勅願寺となった。のちに、永禄8年(1565年)に浄土宗に転じ、正保元年(1644年)に福岡藩第2代藩主黒田忠之により真言宗の寺院として再興されている(『筑前國統風土記』)。

2021年度に行われた福岡市教育委員会による博多遺跡群221次調査によって、V区・VII区・X区より新たに古代・中世期の人骨が出土した。本資料は、博多遺跡群第78次調査によって出土した人骨と同様に、骨の脆弱化が著しい資料であり、詳細な形質の検討などは行えなかった。ただし、検討可能な範囲で、いくつかの新しい知見を追加できたため、以下にその検討結果を報告する。

分析にあたって、歯牙の咬耗度による分類および年齢の推定には、(栃原 1957)による方法を用いた。また、性別の推定についてはBuikstra&Ubelaker 1994およびKlales, A.R. et al. 2012による方法を用いた。

年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』(1988)記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上(詳細な年齢は不明)とする。

今回出土した人骨とその概要については、以下の(表1)にまとめた。

表1

番号	V区2面160号	V区2面336号 B01
性	不詳	男性
年齢	不詳	成年
時代	15世紀以前	16世紀後半以前
埋葬施設	—	
頭位	北	顔面を南西、咬合面を北
埋葬姿勢	頭骨のみ	頭骨のみ
副葬品	なし	なし
備考	獣骨を伴う	獣骨を伴う/刀傷を認める

番号	VII区1面003号	VII区1面050号	X区2面377号
性	不詳	男性	不詳
年齢	成年	老年	成年から壮年
時代	9世紀中頃	12世紀後半	12世紀以前
埋葬施設	木棺墓	土壙墓	土壙墓?
頭位	北	北	—
埋葬姿勢	改葬?	右側臥屈位	頭骨のみ
副葬品	なし	龍泉窯系青磁碗 (12世紀前半)	なし
備考	木棺のAMS年代は8世紀後半から9世紀中頃	現場にて右大腿骨最大長を計測	土壙墓が溝遺構に切られる

2. 遺構別人骨出土状況および所見

《V区2面160号人骨》

① 出土状況

V区2面の溝状遺構埋土上位から人骨が出土している。人骨は頭蓋のみが左側頭部を上、頭頂部を北に向けて出土している。頭蓋骨の北東・南東側に鉄滓が出土しており、そのさらに東側に長さ25cmほどの獣骨が出土している。また、周囲からは人骨片が出土している。

② 人骨所見

- 保存状態：本個体の残存部位は左側頭骨の一部および左頭頂部のみである。
- 性別・年齢：当人骨の保存状態は良好ではないため性別判定・年齢推定は不明である。

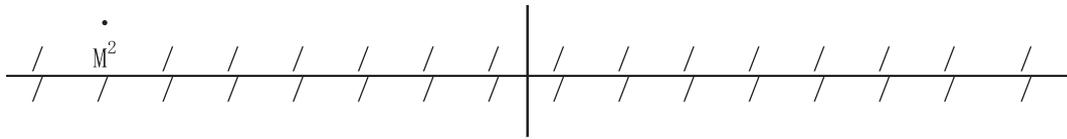
《V区2面336 B-01号人骨》

① 出土状況

V区2面の溝状遺構下位の底部近くから人骨が出土している。人骨は頭蓋のみが顔面を南西に向けて、頭蓋底を北東に向けて出土している。周囲から他の骨は出土していない。

② 人骨所見

○保存状態：本個体は右側頭骨および後頭骨のみが残存しており、後頭骨左側のラムダ縫合の下部付近から欠失している。ただし、歯牙の一部は残存している。残存している歯牙の歯式は以下の通りである。



(○歯槽解放、×歯槽閉鎖、/欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c齶歯 以下同様)

○性別・年齢：眼窩上隆起の発達が認められたため男性であると判定される。さらに、矢状縫合は5cmほどを残して閉鎖しており、かつ冠状縫合およびラムダ縫合が閉鎖していないこと、上顎の右第二大臼歯については咬耗度が栃原の1°c (1957) に相当することから、年齢は成年であると推定される。

○特記事項：左側頭頂骨から後頭骨にかけて切創の可能性がある痕跡が認められた (図2)。痕跡の幅は約12mm、長さは86mmである。痕跡を拡大すると、端部が角ばり、鋭利なものによって切断された痕跡であると認められる (図3)。これについては、本個体の死亡前後に付けられた痕跡である可能性が高いと推定される。

切創を受傷痕であると考えた場合、この切創は線状かつ平滑な切創であるため坂上和弘氏による切創の細分によるcut-off markに分類でき、切創の角度に関しては、ラムダ縫合と垂直になるように基準線を設定した場合には55°を示し、斜めの受傷痕に分類できる (Sakue 2010)。刃の方向に関しては、坂上氏より、切創面が平滑である○部より刃が入り、段が生じている→一部で刃が止まったと解釈できるとご教示いただいた (図2)。この向きは緻密質の条痕も切創と並行に生じているため矛盾はない。本切創は後方より左頭頂骨から左のラムダ縫合を切りながら左の上頂線のやや上部で刃が止まっていると推定される。したがって後方から斜めに利器を振り下ろしたことによって生じた痕跡である可能性が高い。

《Ⅶ区1面003号人骨》

① 出土状況

Ⅶ区1面の長方形木棺墓から頭位を北向きにして出土している。身のうち関節状態を保っている部位は左肩関節と下顎骨の北側から出土した椎骨のみである。頭蓋骨は木棺の底板から推定される北側木口に頭頂部が接した状態で出土している。下顎骨は頭蓋骨の西側、顎関節がやや外れた位置からオトガイを北向きに咬合面を下向きにして出土しており、その西面からは椎骨が3点連なった状態で出土している。

肋骨については頭蓋骨の南西から散乱した状態で出土している。肋骨と下顎骨の間から右上腕骨と肩甲骨が関節状態ではないものの近接して出土している。頭蓋骨の南側からは左上腕骨が近位を北側にに向けた状態で出土し、その南西側から左右の寛骨が出土しているが関節状態は保っていない。

木棺の南側からは左右の下肢が長軸をそろえた状態で、近位部を北東に、遠位部を南西に向けて出土している。

以上に記述した出土状況に関する所見から、本個体に関しては一部関節状態を保っているものの、全体として解剖学的な位置関係を伴っていない。したがって、かなり軟部組織の腐朽が進んだ段階にお

いて遺体が人為的ないしは自然的に乱されている可能性が高い。可能性として、①改葬、②盗掘、③土砂の流入が考えられる。

ただし、木棺の南側から長骨が長軸をそろえた状態で出土していることを踏まえれば、遺体の腐朽が一定程度進んだ状態で人為的な影響を受けたと推察される。

② 人骨所見

○保存状態：本個体については、全体的に保存状態は良好ではないものの少なくとも1体分の全身骨格が出土している。単体埋葬であるか、複数埋葬であるかの確認のために、部位同定を試みたが保存状態が良好ではなく困難であった。歯牙の一部が遺存していた。遺存した歯牙の歯式は以下の通りである。

○性別・年齢：性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。歯牙の咬耗度については、栃原の1° cから2° bを示し、推定される年齢は成年である。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	M ₁	○	○	○	○	○	/	I ₂	C	P ₁	P ₂	/	M ₂	M ₃		
			

○特記事項：下肢骨の一部については、現場にて計測値を得られた。参考値ではあるが計測値と比較群を（表2）に示す。比較群の平均値を比べると女性の値に近い。

得られた計測値から推定される身長については、藤井による推定式（藤井 1960）からは、149.5cm、女性ならば146.8cm、Trotter & Gleserによる推定式（Trotter & Gleser 1958）からは154.9cm、佐宗・埴原による推定式（佐宗・埴原 1998）からは女性ならば143.9cm（主軸法）、144.1cm（標準化主軸法）という推定値を得られた。

《Ⅶ区1面050号人骨》

① 出土状況

Ⅶ区1面の楕円形の墓抗から頭位を北向に、顔面を西向きにした右側臥屈葬位の状態で出土している。右側臥屈葬位の状態で骨の相対的位置関係に乱れはない。左右肩関節は関節状態を保ち、両肘は伸展しており、左上腕骨は右上腕骨の上から、左尺骨と関節状態で出土、右前腕は左右膝関節下から

表2.推定身長と比較

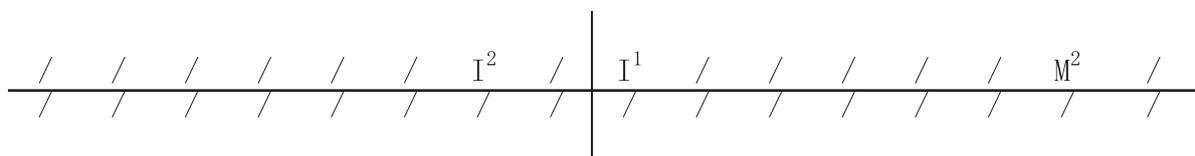
Martin No.		l(最大長)
博多221 Ⅶ区1面003号(r)		(383)
土井ヶ浜(♂・1)(弥生)1	N	23
	M.	436.7
土井ヶ浜(♀・1)(弥生)1	N	23
	M.	402.4
吉母浜(♂・1)(中世)1	N	18
	M.	417.1
吉母浜(♀・1)(中世)1	N	22
	M.	378.5
材木座(♂・1)(中世)2	N	10
	M.	417.1
材木座(♀・1)(中世)2	N	3
	M.	380.1
天福寺(♂・1)(江戸)1	N	19
	M.	416.9
天福寺(♀・1)(江戸)1	N	13
	M.	379.4
九州(♂・1)(現代)3	N	62
	M.	405.7
九州(♀・1)(現代)3	N	13
	M.	379.8

1.永井(1988) 2.鈴木(1956) 3.阿部(1955)

出土、強屈した下肢を抱え込むように左右の掌を重ね、指骨の遠位端を西に向けている。左右ともに股関節と膝関節を強屈しており、左右の足根骨も近接した位置から出土している。指と同様に足も揃えていたと考えられる。したがって右側臥屈葬位で、両腕で強屈した下肢を抱え込んだ状態で埋葬され、さらに、解剖学的な位置関係に矛盾はなく、改葬の痕跡は認められない。なお、副葬品として前頭部西側からは龍泉窯系の青磁（12世紀後半頃）が出土している。

② 人骨所見

○保存状態:本個体の残存状況は良好ではない。頭蓋骨は頭頂部および左右側頭部・後頭部および上顎骨が遺存している。下顎骨は左下顎体から頤部分までが遺存する。歯牙の一部が遺存しており、同定困難な歯牙片を含むが遺存した歯牙の歯式は以下の通りである。



躯幹骨は一部遺存しているが残存状況が不良であり詳細な部位の特定はできない。仙骨は第1仙椎から第2仙椎にかけて遺存し、左寛骨の寛骨臼の一部と右寛骨の坐骨付近が遺存している。

上肢は左右上腕骨が骨頭部分を除いて遺存し、左右の前腕も一部遺存している。指骨も一部遺存している。

下肢骨は左右大腿骨骨体部、左右脛骨骨体部、左右腓骨骨体部が遺存している。足根骨も一部遺存している。

○性別・年齢:乳様突起が発達していることから男性と判定される。歯牙の咬耗度は栃原の2° b～3° (1957) であり、老年であると推定される。

《X区2面377号人骨》

① 出土状況

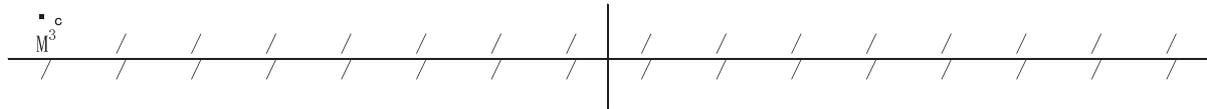
X区2面の土壙墓内の西側から、顔面を北向きにして出土している。本土壙墓（377号土壙）および人骨の出土していない368号土壙に関しては溝遺構310号に切られており、本土壙墓に関してはわずかに頭蓋骨の一部が遺存するのみである。また、頭蓋骨取り上げ時に頭蓋骨下より歯牙が1本出土している。

② 人骨所見

○保存状態:本個体に関しては残存状況が良好ではなく、頭頂骨から側頭骨および後頭骨にかけて遺存しており、冠状縫合付近から顔面部は遺存していない。なお、歯牙の一部が本個体に伴って出土しており、出土した歯牙の歯式は以下の通りである。

○性別・年齢:性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。歯牙の咬耗度については、栃原の1° c (1957) であり、年齢は成年から熟年であると推定される。

○特記事項:出土した歯牙には齶歯が認められた。



3. 本遺跡における葬送行為

埋葬姿勢に関して、これまで博多遺跡群において出土した事例は他地域では中世において一般的にみられるようになる「頭北位・右側臥屈葬」に定まらないという評価がなされてきた。その中で、今回報告したⅦ区1面050号人骨の埋葬姿勢が、博多遺跡群第69次調査報告において中橋氏によって報告された「頭北位右側臥屈葬」をもった中世人骨（中橋 1992）に次いで博多遺跡群では2例目の事例であったことは注目されたい。

また、古代から中世にかけての葬送・墓制として遺棄（葬）と呼ばれる葬送形態が認められる（勝田 2012、水藤 1991など）。本報告において取り扱った資料にも溝状遺構などから頭蓋骨のみで、獣骨ともに出土した人骨資料（Ⅴ区2面160号・336号）が2例確認された。この他にも、木棺墓葬、土抗墓葬も検出され、人骨を伴った遺構の年代も古代から中世・近世移行期にかけての葬送・墓制を考察する上では極めて重要な事例であろう。

特に、Ⅴ区2面336号溝遺構に関して、遺構と同レベルにて頭蓋骨の周囲から3点、同大の石が出土している。これについては、a. 遺構内の流れ込みである可能性、b. 人為的に埋置されたものである可能性を指摘できる。流れ込みであった場合、本遺構が溝遺構であること、本個体と共に若干の獣骨が出土していることも踏まえ、頭蓋骨のみの遺棄葬である可能性がある。この類例としては、大宰府225次報告（太宰府市教育委員会 2004）による溝遺構から検出された遺棄葬が挙げられよう。

次にそれを意図的なものとして考えた場合、a. 首塚として埋葬された可能性、b. 上部構造を伴わず1次葬、2次葬としての埋置である可能性が考えられる。首塚として、埋葬された場合、そこには標識としての上部構造を伴うことが指摘されている（室井 2015）。本遺構検出時においては上部構造の存在は不明であり、首塚であると断定することはできない。また、中世における首塚の好例として、岡山県の吉野口遺跡より出土した寿永・治承の乱によって滅亡した姉尾兼康の首級とされる出土例がある（岡山市教育委員会 1997）。吉野口遺跡出土の人骨の場合、下顎骨・頸椎を伴った状態で出土している。本個体の場合、下顎骨・頸椎を伴わないため死後直ぐに埋葬されたわけではない可能性が高い。したがって、本遺構を意図的に造成されたものであると考えた場合、本遺構は埋置であったと考えた方が良好だろう。

4. まとめ

2021年度の福岡市教育委員会による発掘調査により、少なくとも4体の古代から中世にかけての人骨が一部青磁を副葬品として伴って出土した。9世紀中頃から16世紀にかけての平安時代から戦国時

代にかけてのものであるが、残念ながら保存状態が良好ではなく、形質的な特徴を明らかにすることができなかった。

今後の資料の増加によっては、葬送・墓制のみならず、当該時期における寺社権門の位置付けやその役割について考察できる可能性も示唆されるため、ますますの資料の蓄積に期待する。

謝辞：本遺跡の発掘および本報告を行う機会を与えてくださり、種々のご教示を頂いた福岡市教育委員会の大庭康時氏、岩熊拓人氏に深謝致します。また、受傷痕の観察に関してご助言頂いた国立科学博物館の坂上和弘氏にも謝意を表します。

資料整理にあたっては、九州大学大学院地球社会統合科学府基層構造講座の松尾樹志郎・森春奈・田淵朱莉・矢崎空音の諸氏のご助力を得ました。

文献史的な考察については、九州大学大学院人文科学府日本史学研究室の三浦颯太氏のご助力を得ました。末筆ながら、記して謝意を表します。

参考文献

- 阿部英世（1955）「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、『人類学研究2』。
- 岡山市教育委員会（1997）『吉野口遺跡』、岡山県岡山市。
- 貝原篤信（貝原益軒 原著）（1973）『筑前國統風土記』、名著出版。
- 勝田 至（2012）「日本葬制史」、吉川弘文館。
- 佐宗亜衣子・埴原恒彦（1998）「日本人女性の新しい身長推定式」、『Anthropological Science』106-1。
- 水藤 真（1991）『中世の葬送・墓制』、吉川弘文館。
- 鈴木 尚（1956）『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』、岩波書店。
- 玉川文化財研究所（2004）『大宰府条坊跡26大宰府市の文化財76』。
- 栃原 博（1957）「日本人歯牙の咬耗に関する研究」、『熊本医学会誌31』。
- 中橋孝博（1987）「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、『人類学雑誌95』。
- 中橋孝博（1992）「博多遺跡群第69次調査・博多遺跡群第69次出土中世人骨」、『福岡市埋蔵文化財報告書第288集』。
- 中橋孝博（1995）「博多遺跡群第78次調査・博多遺跡群第78次調査出土の中世人骨」、『福岡市文化財報告書第303集』。
- 九州大学医学部解剖学第二講座編（1988）『日本民族・文化の生成 2』、六興出版。
- 長岡朋人・平田和明・大平里沙・松浦秀治（2008）：「鎌倉由比ヶ浜南遺跡から出土した中世人骨の身長推定」、『Anthropological Science』116-1。
- 福岡市教育委員会（1994）『博多遺跡群第42次調査・福岡市埋蔵文化財報告書第245集』。
- 藤井 明（1960）「四肢長骨の長さとの関係に就いて」、『順天堂大学体育学部紀要3』。
- 室井康成（2015）『首塚・胴塚・千人塚』、洋泉社。

- BUIKSTRA, J.E & D.H, UBELAKER (1994) *Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains*, Arkansas Archeological Survey: Fayetteville.
- KLALES, A.R., OUSLEY, S.D., VOLLNER, J.M., (2012) A revised method of sexing the human innominate using Phenice's nonmetric traits and statistical methods, *American Journal of Physical Anthropology*, 149-1.
- MARTIN, R., (1928). *Lehrbuch der anthropologie*, Jena: Fischer.
- TROTTER, M & G.C, GLESER (1958) :A re-evaluation of estimation of stature based on measurements of stature taken during life and of long bones after death, *American Journal of Physical Anthropology*, 16-1.
- SAKAUE, K., (2010) A case report of human skeletal remains performed "Tameshi-giri (test cutting with a Japanese sword)", *Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series D, Anthropology*, 27-36.

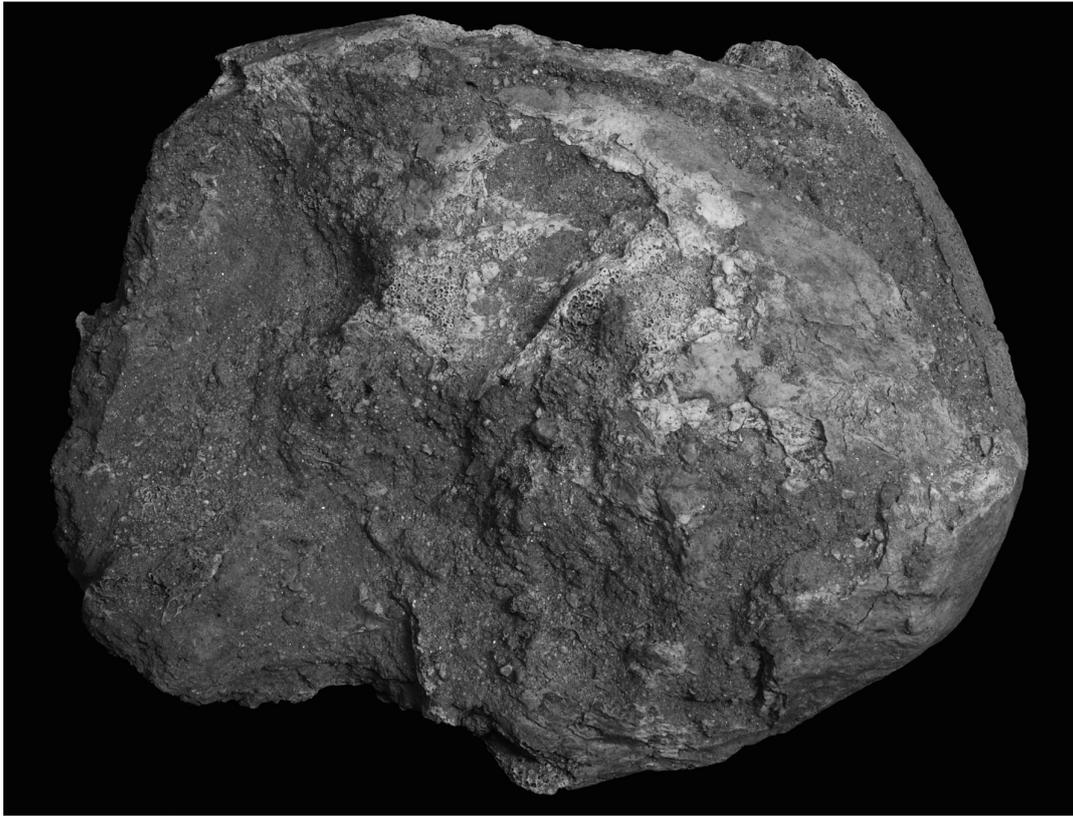


図1 V区2面336号 頭蓋骨残存状況

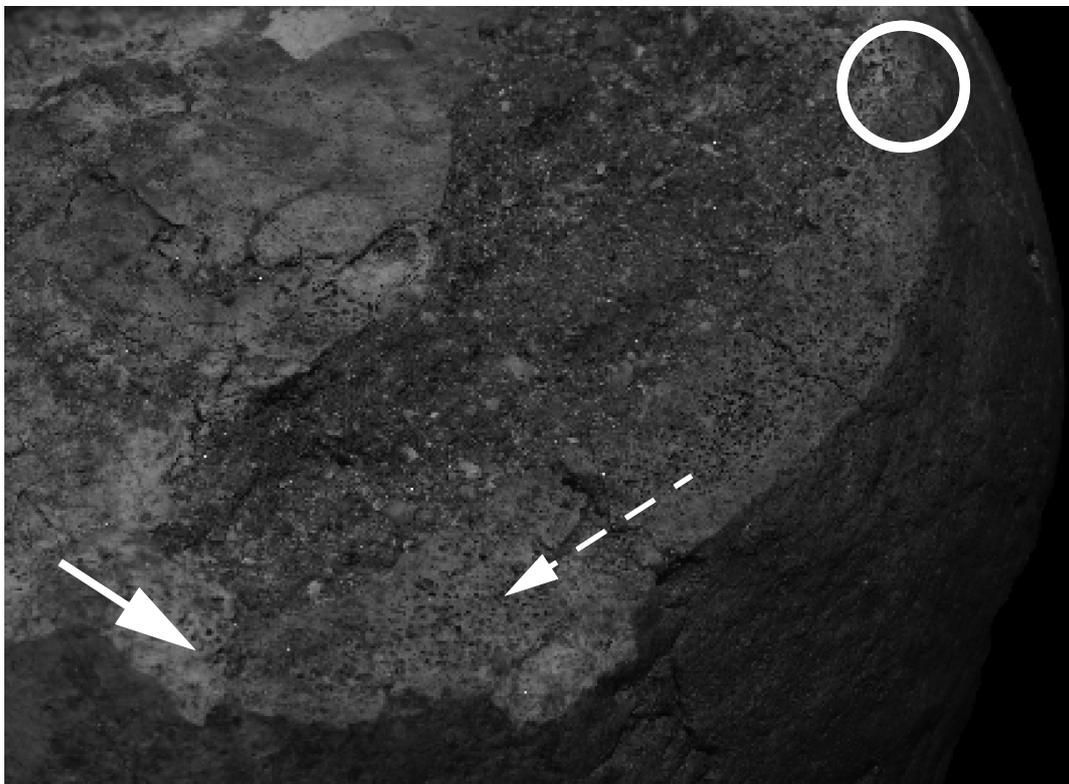


図2 V区2面 336号 受傷部
(○部が切創痕の始点、実線の→が終点、破線の→は受傷方向を表す)

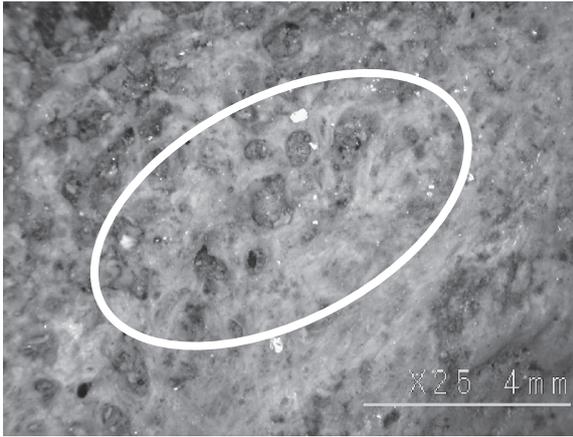


図3 V区2面 336号 受傷部拡大画像
(脛骨部・緻密質の状況から死亡前後の切創痕と推定)

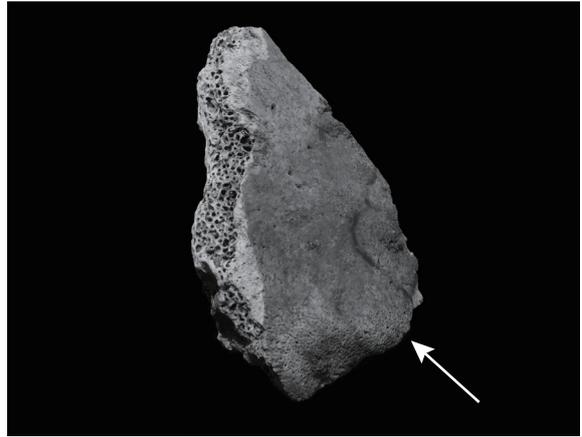


図4 V区2面 336号 眼窩上隆起

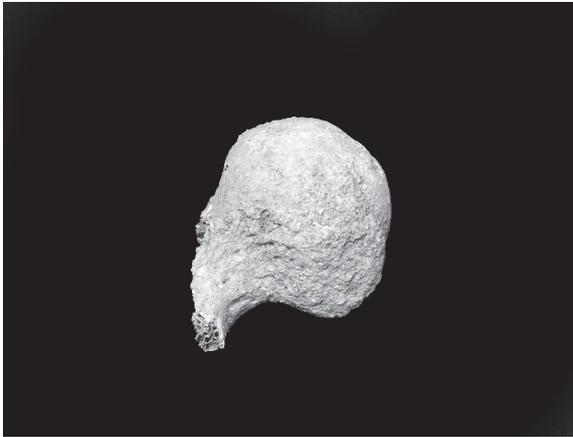


図5 VII区1面 50号
右大腿骨近位部骨部側面から撮影

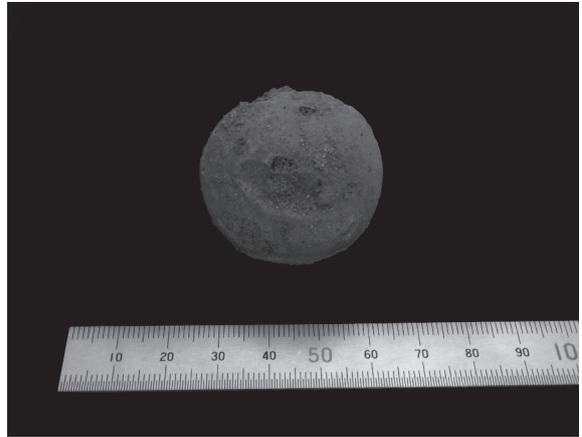


図6 VII区1面 50号
右大腿骨近位部骨頭部内面から撮影



図7 VII区1面 3号 上肢骨

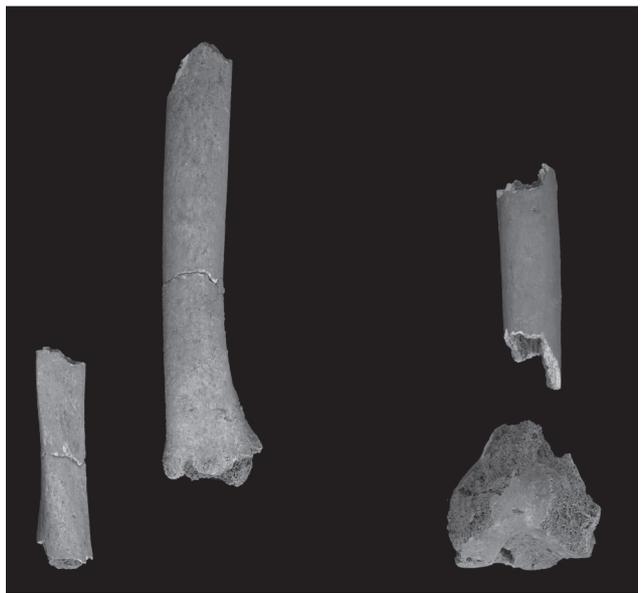


図8 VII区1面 3号 下肢骨

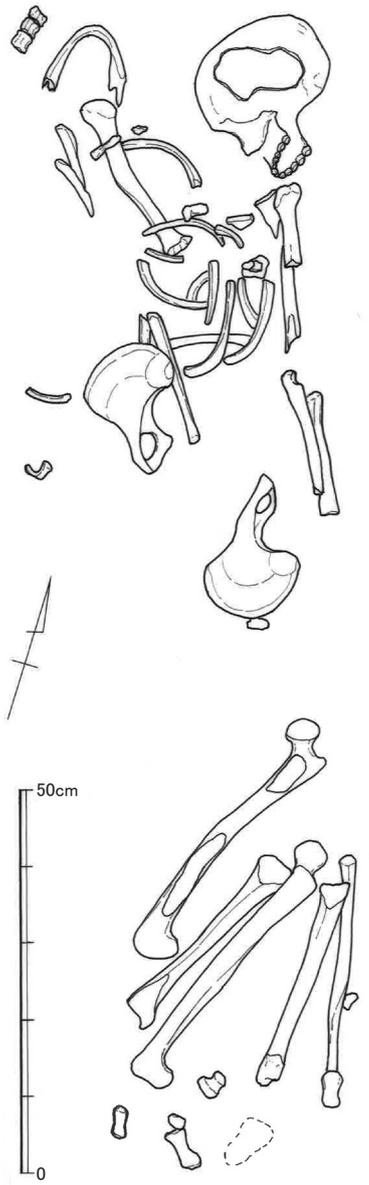


图9 VII区面003号人骨

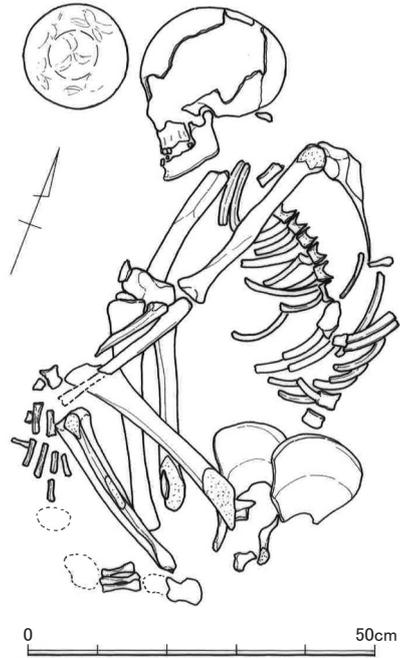


图10 VII区面050人骨



图11 V区2面336 B-01号人骨



图12 V区2面003336 160号人骨



图 13 Ⅶ区 1 面 003 号人骨



图 14 Ⅶ区 1 面 050 号人骨



图 15 Ⅹ区 2 面 377 号人骨

報告書抄録

ふりがな	はかた 196							
書名	博多 196							
副書名	—博多遺跡群 第221次調査Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅻ区の概要—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1509集							
編著者名	大庭康時(編)							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかた いせきぐん 博多遺跡群 第221次	ふくおかけんふくおかし はかた く 福岡県福岡市博多区 かみかわぼた 上川端97-1	40132	0121	33° 35' 38"	130° 24' 35"	20180426 ～ 20220218	4443.67㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群 第221次	集落	古代・中世・ 近世	柱穴、土坑、 井戸、溝、 土葬墓、石 積遺構	土器、陶磁器、 石製品、木製品、 金属製品、獣骨、 人骨		中世初頭の港湾遺構である石積遺構が出土した。日宋貿易の主要輸出品であった硫黄が出土した。		
要約	<p>調査地点は、博多遺跡群の西縁、博多湾に面して形成された後背湿地を流れる河川の川岸に当たる。</p> <p>砂丘末端から河川堆積層にかけて、おおむね南北に敷地を縦断して、11世紀後半から12世紀前半の石積遺構(護岸)が出土した。石積遺構は、港湾遺跡の一部と考えられる。</p> <p>当該期の博多は、それまで国際貿易の拠点であった鴻臚館が廃絶した後、これに代わる貿易拠点として急速に都市化が進んでいた。博多には、中国人商人が住み、唐房と呼ばれる中国人居住区を作って貿易に携わっていた。その貿易港が発見されたものといえる。</p> <p>石積遺構は12世紀中頃～後半の洪水で埋没し、その後12世紀後半には屋敷墓が営まれるなど、急速に都市域に取り込まれた。そして、鎌倉時代末期には西大寺系律宗寺院である大乘寺の寺地となった。</p>							

博 多 196

—博多遺跡群 第221次調査Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅻ区の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1509集

2024年3月22日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 有限会社 宏栄社印刷
福岡市南区清水1丁目10-5



博多

196

Ⅰ 博多遺跡群

第221次調査Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅻ区の概要Ⅰ

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第一五〇九集

二〇二四

福岡市教育委員会